凡そ文字と筆にかゝはりのあるところは、それぞれ菅公の徳をたゝへ、その能筆にあやからうといふ祈念から、筆子、門人、弟子一統殘らずを招いて、盛大なところは盛大に、さびれてゐるところはさびれたなりに、それ〴〵思ひ〳〵の趣向をこらし乍ら、とにも、かくにも、この日いち日を樂しむのがそのならはしでした。

『だから言ふんだ。理のねえことを言ふんぢやねえんですよ。あッしや無筆だから、先生も師匠も和尚もねえが、旦那はさうはいかねえ、物がお違ひ遊ばすんだからね。それを言ふんですよ！それを！』

やッてゐるのです。

御番所をさがッて歸ッての夕ぐれのしッぽりどき……。傳六、でんでん、名人、むッつり、ふたりの、これは初午であらうと二十五日であらうと、年中の行事であるから……、ここを先途と傳六のやッてゐるのに不思議はないが、やられてゐる名人はとみると、灯もない部屋の眞中に長々となッて、忍びよる夕ぐれを樂しんでゐるかのやうでした。つまりそれがよくないといふのです。

『きのふや今日のお約束ぢやねえ、もう十日も前からたびたびさう言ッて來てゐるんですよ。牛

込の守屋先生、下谷の高島先生、いの字を習ッたか、ろの字を習ッたか知らねえが、兩方から二度も三度もお使ひを頂いてゐるんだ。去年も來なかッた。をととしも見えなかッた。古いむかしの筆子ほどなつかしい。今度の天神まつりにはぜひ來いと、わざわざねんごろなお使ひを下さッたんぢやねえですか。のッぴきならねえ用でもあるから格別、さうしてごろごろしてゐるひまがありや、兩方へ二三べんいッて來られるんですよ。じれッてえちやありやしねえ。日ぐれをみてゐたら、何が一體面白えんです』

『……』

『え！　旦那！　バクチにいッてらッしやい、女狂ひにいッてらッしやいと言ふんぢやねえですよ。親は子の始まり、師匠は後生の初まり、御機嫌伺ひに行きや先生方がよぼよぼの皺をのばしてお悦びなさるから、いッてお世辭を使ッていらッしやいと言ふんだ。世話のやけるこッちやありやしねえ。そんな顏をして障子とにらめッこをしてゐたら、何が面白えんですかよ。障子には棧はあるが、棧は棧でも女郎屋の格子たア違ひますぜ。それを言ふんだ。それを！』

『……』

『じれじれする旦那だな。何とか言ひなさいよ』

コトリ、とそのとき、何か玄關先へ止まッたらしい氣勢でした。どうやら駕籠らしいのです。と思はれると一緒に、呼ぶ聲がきこえました。

『お待ちどほさま、お迎ひでござんす……』

『さうれごらんなせえ。だから言はねえこッちやねえんだ。牛込か下谷か、どッちかの先生が待ちかねてお迎ひの駕籠をよこしたんですよ。早えところお支度なせえまし！』

『……？』

『なにを考へてゐるんです。首なぞひねるところはねえんですよ。シビレを切らしてどッちかの先生がわざわざお迎ひによこしたんだ、行くなら行く、よすならよすとはきはき決めたらいいぢやねえですかよ！』

『あの、お待ちかねですから、お早く願ひます……』

せき立てるやうにまた呼んだ表の聲をきゝ乍ら、不審さうに首をかしげて、しきりと鼻をくんくん鳴らしてゐたが、不意に名人がおどろくべきことを言ッて立ちあがりました。

『醫者の駕籠だな！　たしかに煎藥の匂ひだ。どこかで何かゞ何かになッたかも知れねえ。パチクリしてゐるひまがあつたら、十手でも磨いて出かける支度でもしろい。うるせえ奴だ……』

のぞいてみると、まさしくその言葉の通り醫者の駕籠です。それもよほど繁昌してゐる醫者とみえて、立派な乘用駕籠でした。

しかし提灯はない。それが先づ不審の種でした。灯りも持たずにいきなり玄關先へ駕籠をすゑて、しきりとせき立ててゐるところをみると、急用も急用に違ひないが、それよりも人目にかゝることを恐れてゐる祕密の用に相違ないのです。

『人違ひではあるまいな』

『ござんせぬ、旦那樣をお迎ひに來たんでござんす。どうぞ、お早く願ひます』

垂れをあげて促した駕籠の中をひよいとみると、何か書いた紙片が目につきました。

『くれぐれも御内密に願ひあげ候』

といふ字が見えるのです。

『よし、分りました。――ついて來い！』

どこの誰が何の用で呼びに來たのか、ところもきかず名もきかず、行く先一ッきかうとしないですうと垂れをおろすと、さッさと急がせました。

きゝたくも鳴りたくも傳六なぞが口をさしはさむひまもないほど、駕籠がまた早いのです。

二

海賊橋から江戸橋を渡ッて、伊勢町を突き當ると大傳馬町、そこから左へ曲ると、もう雛市の始まッてゐる十軒店の通りでした。その突き當りが今川橋――渡ッて、土手ぞひに左りへ曲ッたかと思ふと、まもなく駕籠は、そこの塗町の角の一軒へ、ぴたりと息杖をおろしました。案の定このあたり評判の町醫、岡三庵の前なのです。

『お越しだな！　こちらへ、こちらへ。そこでは人の目に立つ、失禮ぢやが、こちらから御案内申せ』

待ち切ッてゐたとみえて、慌たゞしい聲と一緒に、その三庵がうろうろし乍ら取り紊した顏をみせるとおろした駕籠を内玄關の方へ廻させて、そのまま人の目にかゝるのを恐れるやうにあたふたと招じあげました。

『わざわざお呼び立ていたしまして、何とも申しわけござりませぬ。いえなに、實はその、何でござります。手前參邸いたすが本意でござりまするが、――これッ、これッ、なにをうろうろしてをるのぢや。來てはならぬ。行け、行け、のぞくでない！』

言葉もしどろもどろに、うろたへてゐるのです。ひとり殘らず家人の者も逮ざけて、きよときよとと八方へ目を配り乍ら、案内する間も脊え〳〵導いていッたところは、二階の奥まッた豪壯きはまりない部屋でした。

高い天井、見事な柱、凝ッた襖、なにからなにまで入念な品を選んだ座敷です。その部屋の床ぎはへこはごは坐ると、恐ろしいものをでもしらせるやうに三庵が、靑ざめた顏をふり向け乍ら默ッて床の間をゆびさしました。

血だ！　大なき床いッぱいのやうにかゝッてゐる狩野ものらしい大幅の上から下へ、ぽたぽたと幾滴の血がしたゝりかゝッてゐるのです。

『なるほど、わざわざお呼びはこれでござりまするな。いッたいこれはどうしたのでござる』

『どうもかうもござりませぬ。岡三庵、今年五十七でござりまするが、生れてこのかた、こんな氣味わるい不思議に出會うたことがござりませぬゆゑ、たうとう思ひあまッて、御内密におしらべ願はうと、お越し願ッたのでござります。よくまあこれ御覽下さりませ。天井からも、壁からも、只のひと滴垂れたあとはござりませぬ。床にも只の一滴垂れおちてはをりませぬ。それだのにどこから降ッて來るのか、この部屋のこの床の間へ軸ものをかけると、知らぬまにこの通り血

が降るのでございます』

『知らぬまに降る？――なるほど、さうでござるか。では、今までにもたびたびこんなことがあッたのでございまするな』

『あッた段ではござりませぬ。これを先づ御覽下さりませ』

さう言ふまも三庵は、あたりに氣を配り乍ら、恐々袋戸棚をあけると、氣味わるさうに幅物を取り出して、名人の前にくりひろげました。

數は六本。その六本のどれにもこれにも、同じやうにぽたぽたと、血が滴たりかゝッてゐるのです。

『なるほど、ちと氣味のわるい話でござりまするな。血のいろに古い新しいがあるやうぢやが、いつ頃から一體こんなことが始まッたのでござる』

『數の通り、丁度六日前からでござります。そちらの右はじが一番さきの幅でござりまするが、前の晩まで何の變りもございませんでしたのに、朝、ちよッと、この部屋に用がござりましたゆゑ何の氣なしに上ッて參りまして、ひよいと床を見ましたら、その通り血が降ッてゐたのでございます。醫者のことでございますゆゑ、稼業柄、血にはおどろかぬ方でございまするが、それに

しても場所が床の間でございますそのうへに、この通り、かゝッてゐる品が軸物でございますゆゑ、見つけたときは仰天いたしまして、腰をぬかさんばかりにおどろきましたが、何かの間違ひだらう、間違ひでなくば誰かのいたづらだらう位に思ひまして、そちらの二本目のと掛け替へてをりましたところ、朝になると、また血が降ッてゐるのでございます。掛ければまた降る、替へればまた降る、三朝、四朝、五朝とつゞきましたゆゑ、すッかりおぢ毛立ちまして、すぐにも誰かに知らせようと思ひましたが、うッかり人に話せば、忽ち八方へ噂がひろがるのは知れきッたことでございますのでな、やれ幽靈屋敷ぢや、やれ血が降るさうぢやとつまらぬ評判でも立ちまして、折角これまでにした門前がさびれるやうなことになッてはと、家人にも知らさずひたがくしにかくしてをりましたが、今日といふ今日はたうとう我慢が出來なくなッたのでございます。いつもは朝降ッてをるのに、今さッき日ぐれ方に、何氣なく上ッて參りまして、ひよいとみたらこの通り生々としたのが降ッてをりましたゆゑ、生きた心持もなくあの駕籠を大急ぎであなたさまのところへ飛ばしたのでございます』

こんな怪事はまたとない。犬の血、猫の血、人の血、何の血であるにしろ、替へれば替へる一方から知らぬまに降ッてゐるとは、いかにも不思議です。念のために名人は、軸のうへ、天井、

左右のぬり壁、軸の下、殘るくまなく手燭をさしつけて見しらべました。しかし、軸の外には血らしいものの飛沫一滴見えないのです。

『さあいけねえ、左り甚五郎の彫ッた龍は夜な夜な水を噴いたといふ話だが、狩野の方にだッて三人や五人、左り甚五郎がねねえとも限らねえんだ。ひよッとするとこいつが血を噴く畫といふ奴にちげえねえですぜ。え、ちよいと、違ひますかい』

『黙ッてろ。うるさい奴だ。へらず口を叩くひまがあッたら、こッちへ灯を出しな』

さッそくに横から始めかけた傳六を叱りとばして、自身も手燭をかざし乍ら廊下へ出ると、部屋の位置、出窓、内窓、間取りの工合、四方八方へ目を光らせました。

二階はこの部屋と、次の間を入れてふた間きりです。そのふた間の前に、ずッと廣い廊下があッて、廊下の外はあまり廣くない内庭でした。その庭をはさんで、脈部屋、治療部屋、藥部屋なぞが別棟になッてゐるらしく、灯りを出してすかしてみると、庭木はあるが高いのはない。庇もあるが、外からこの部屋へ闖入して來る足場は一ッもないのです。

當然のやうに名人の靜かな問ひが下りました。

『梯子段は？』

『今上ッて來たのが一ケ所きりでござります』

『夜はどなたがこの二階にお寢みでござるか』

『どうして、どうして、見らるゝ通りこれは自慢の客間でござりますのでな。寢るどころか、家人のものは滅多にあげませぬ。この下が手前ども家族の居間に寢間、雇人どもは向うの別棟でござります』

『その雇人はいくたりでござる』

『先づ代脈がひとり、それから書生がふたり、下男がひとり、陸尺がふたり、それに女中がふたり』

『うちうちの御家族は？』

『手前に、家内、それから娘、それから――いいや、いいや、それだけぢや、ことし十九になる娘がひとりきりでござります』

『しかとそのお三人か！』

『間違ひござりませぬ。天にも地にも娘がひとり、親娘三人きりでござります』

『別棟からの廊下は筒ぬけでござるか。それともなにか仕切りがござるか』

『大ありでございます。なにを言ふにも表の方へは、朝から晩までいろ〳〵の病人が出這入りしますのでな、奥と表とごッちやになッて不潔にならぬやうにと、畳も仕切り戸で仕切ッて、夜は格別にきびしく雇人どもへも申し渡してありますゆゑ、この二階はおろか、奥へも滅多には參られませぬ』

奥への出入りさへも、きびしく止めてあるといふのです。しかし、外からこの二階へ這入りうべき足場は、なほさらどこにもないのでした。ないとしたら、傳六の言ふがごとく畳自らが血を噴けば知らぬこと、でない限り星は先づ、家の中に、と睨むのが至當です。

『仕様がねえ、あんまりぞッとしねえ手だが、やッつけてみようぜ。ねえ、おい、兄哥』

『へ？……』

ふり向いた顔へ、ぽつりと不意に不思議な右門流が飛び出しました。

『なにか踏み臺をお借り申して、ナゲシへこの繪をみんな裏返へしにして掛けな』

『裏返へし！』

『掛けりやいいんだ。早くしな！』

床の間の一軸も裏返へしに掛けさせてずらり七枚並んだのを見眺めると靜かに三庵に命じました。

『いらざる口をさしはさんではいけませぬぞ。雇人からがよい。家の者殘らずを順々にここへ呼んで參らッしやい』

三

待ちうけてゐるところへ、ことりことりと下から足音が近づいて、若い男の顔が先づぽッかりと現れました。

『書生か』

『左様でございます』

『名は』

『平四郎と申します』

なにかもッと聞くだらうと思ッたのに、それッきりです。

『よし。行け』

けげんさうに歸ッていッたのと入れ違ひに、また若い顔が現れました。

『おまへも書生だな』
『左様でござります』
『親は男親がすきだか、母親がすきだか』
『は？……』
『よし、よし、もう歸れ』
不思議さうに首をかしげて降りていッたあとから、こと、ことと足音が近づきました。輕いその足音をきいたばかりで、あげもしないのです。
『よし分ッた。下男だな。來んでもいい。かへれ』
入れ違ひに重い足音が近づくと、代脈らしい男の顏が現れました。ちらりとその顏を見たばかりです。
『よし。おまへにも用はない。早く行け。あとはふたりづつ來るやう言ひつけろ』
これもけげんさうに歸ッたあとから、陸尺たちがふたり現れました。ふん、と言ッたきり、きもしないのです。入れ違ひにあがッて來たのは、ふたりの女中でした。
『おまへ、すきだらう。傳六、何かきいてみな』

『へ？……』
『おふたりとも、なかなかご縹緻よしだ。物のはずみでどんなことにならねえとも限らねえ、きたいことがあッたら、尋ねてみろと言ッてるんだよ』
『はづかしいや……』
『柄かい！――よし、よし、御苦勞さまでした。もう用はありませぬ。あとはおうちのおふたりだ。すぐに來るやう申して貰ひませう』
同じやうに首をかしげ乍ら降りていッたのと入れ違ひに、物やはらかな衣ずれの音が近づきました。
妻女と、娘のふたりです。母は五十位。あたりまへな顏だが、しかし、娘は打ッて變ッて、寒くなるやうな美人でした。手、指、爪、どこからどこまでがほッそりとしてゐて、青く白く、血のない女ではないかと思へるほどに、しんしんとすきとほッてゐるのです。そのうへにふるへが見える。美しい顏が、足が、かすかに波をうッてゐるのです。
『お名まへは？』
『千萩と申します……』

『ほゝう、千萩さんと言ひますか。今にも散りさうなお名でござりまするな』

上から下へ、右から左へ、娘の顔とふた親の顔とを、じろり、じろりと見比べてゐたが、なにを見てとツたか、ふいと立ち上ると、さツさと歸り支度を始めました。

『造作はござりますまい。何とか目鼻がつきませう。誰にもいツせつ他言せぬやうお氣をつけなさいませよ。いいですかい。お忘れなすツちやいけませんぜ』

特に念を押しておくと、早いものです。すうと出ていツたかと思ふと、しかし、突然、傳六をおどろかして命じました。

『この町内か、近くの町内に、お針の師匠はねえか、洗ツて來な』

『お針？……、お針の師匠といふと、おチクチクのあのお針ですかい』

『決ツてらあ。釣り針や意地ツぱりに師匠があるかい。どこの町内でも、娘があるからにやお針の師匠もひとりやふたりある筈だ。ガチヤガチヤしねえで、こツそりたゝき出して來な』

『……？』

『なにをぼんやり、ヒネツてゐるんだよ。おヒネリ團子ぢやあるめえし、まごまごしてゐりや夜がふけるぢやねえか』

『あんまり人を小馬鹿にしなさんな。ひねりたくてひねツてゐるんぢやねえですよ。裏を返して軸物を掛けて見たかと思や、ひとりひとり呼びあげて、ろくでもねえことをきいて、町内にお針の師匠がをツたら、何がどうしたといふんです。ひねツてわるけりや、もつと人情のあることを言やいいんですよ』

『仕様のねえ男だな。これしきのことが分らなくてどうするかい。くれぐれも御内密にと、三庵先生が拜むやうに頼んでをるぢやねえか。だからこそ、血の一件を知らすまいと思ツて、わざわざ裏返しに掛けさせたんだ。裏は返へしておいても、あの家の者の中に、いたづらをした奴がをツたら、軸を見ただけでもピンと胸を刺されるにちげえねえんだ。胸を刺されりや自然と顔のいろも變らうし――』

『足もふるへるだらうし――』

『それだけ分ツてりや、なにも首なんぞひねるがものはねえぢやねえかよ。ほかの者はみんなけげんさうな顔をして降りていツたが、あの娘だけがふるへてゐたんだ。ばかりぢやねえ。おまへさんはあの娘の顔と親たちの顔と比べてみたかい』

『いいえ、自慢ぢやねえが、あツしやそんな無駄をしねえんですよ。別嬪は別嬪でけツこう目の

保養になるんだからね。皺くちやな親の顔なんぞと比べてみなくとも、ちやんと堪能出來るんですよ』

『あきれた奴だ。だから傳六でんでんニシンの子、酒の肴にもなりやしねえなんぞと子供にまでも馬鹿にされるんだよ。鳶が鷹を生んだと言ふ話はきくが、おやぢの三庵はあの通りおでこの慈姑頭、おふくろさんは四角い顔の寸づまり、あんな似たところのねえ親子なんてものはありやしねえ。不審はそれだ。娘のことを探るのは娘同志、その娘ッ子の寄り集るところと言や、先づ手ッ取り早いところがお針のお師匠さんぢやねえか。三人五人と町内近所の娘が寄りや、あッちの娘の話、こッちの娘の噂、今のあの不思議な娘のことも、何か噂をきいてゐるだらうし、蔭口もたゝき合ッてゐるにちげえねえんだ。それを探るといふんだよ。それをな、ほかのところぢやねえ、女護ヶ島を見つけに行くんだ。分ッたら勇んでいッて來なよ』

『忝けねえ。さういふ風に人情を割ッて話してくれりや、あッしだッてすねるところはねえんですよ。べらぼうめ。どうするか覺えてゐろ、ほんたうに？――おうい、どきな、どきな、邪魔ぢやねえか。道をあけな』

別に誰も道をふさいでゐるわけではないのに、事、ひとたび傳六が勇み立ッたとなるとすさまじいのです。ひらひらと袖をふッていッたかと思ふまもなく、姿が消えました。

四

春近い江戸の宵は、もう風までがぬくやかでした。まちわびてゐるところへ、飛んでかへると目を丸めてゐるのです。

『見つからねえのかい』

『對手は娘ぢやねえですか。あッしともあらう者が、娘ッ子の巣を見のがしてなるもんですかい。ふたところあるんですよ』

『そいつあ豪儀だ。この近所か』

『近所も近所も裏通りの路地に一軒、向うの横丁に一軒、裏通りは五人、向う横丁の方は八人、お節句着物でも縫ッてゐるとみえてね、兩方とも灯りをカンカンともして、一生懸命とおチクチクをやつてゐるんですよ。いい娘の揃ッてゐる方が御注文なら、ちッと遠いが向ふ横丁だ。いきますかえ』

『いい娘が見たくて行くんぢやねえ。近い方がいいや。つれていきな』

手柄顔につれていッたその裏通りへ曲ッてみると、なるほど路地を奥へ這入ッた一軒の表障子にそれらしい娘たちの影が見えました。

『許せよ』

つかつかと這入ッて行くと、行燈のまはりから、一齊にふり向いた五人のお針娘たちをぢいッと見比べてゐたが、頤で示した娘が不思議なのです。

『あの右から三人目の不縹緻な娘だ。あそこの角まで呼んで來な』

『な、な、何ですかい。笑談ぢやねえ、えりにえッてあんなおでこ娘に白羽の矢を立てなくともいいでせう。ほかに見晴らしのいいのがふたりもをるぢやねえですかよ』

『大きな聲を出すな。きこえるぢやねえか。縹緻のいい娘の噂は、縹緻のわるい娘ほど知ッてゐるものなんだ。癖のにぶい奴だ。御苦勞だがちよッと來てくれと言ッて、おとなしくつれて來な』

いちいちと無駄のない計らひでした。にやにや笑ッて、傳六がつれて來たのを見迎へると、おだやかに尋ねました。

『お仕事中をお氣の毒さまでしたな。隱しちやいけませんぜ。あんたの町内はどこでござんす』

『……？』

『怕いこたあねえ、ちよッときゝたいことがあッてお呼び申したんですよ。この近くのお町内ならお知りでせうが、あそこの岡三庵先生のところのお嬢さんのことを何かご存じぢやござんせんかい』

『……？』

不審さうに右門の顔を見眺め乍ら、おどおどと言ひためらッてゐたが、これをみろといふやうに傳六が横からピカピカと振ッた十手に氣がついたとみえて、ふるへふるへ意外なことを言ッたのです。

『ほ、ほかのことは知りませぬが、何でもお櫃を、おまんまを入れる大きなお櫃を、人にも見せずに毎日毎日寶物のやうにしてたいへん大切にしてゐるといふ噂でござります』

『お櫃！　中にはなにが、なにが這入ッてゐるんです！』

『知りませぬ　毎晩夜ふけになるとそのお櫃を大切にかゝへて、お女中さんをひとりお伴につれてごッそりどこかへ出ていくとかいふ噂でござります』

『どこへ行くんです』

『そ、それも知りませぬ。ほかには何も存じませんゆゑ、もう、もう御勘辨下さいまし……』

言ひすてると娘は逃げるやうに駈け去りました。

きゝずてならない噂でした。

名人の目が底深く微笑して、キラリと光りました。

『べらぼうめ、臭えと睨んだらあの青娘、案の定これだ、夜ふけにはまだ一刻近くはあらう。おいらがおぢきぢきに立ちん坊しちや勿體ねえや。藁人形でも見つけようぜ。ついて來なよ』

ずんずん通りを塗町へ出て、土手に添ひ乍ら歩いてゐると、辻占ア、辻占ア、といふわびしい聲と一緒に、土手の切れ目から、ぽツかり白い灯が浮きあがりました。

『子供だな。ちツと可哀さうだが、張り番させるにや却ツていいかも知れねえ。――大將々々』

目も早いが思ひつくのも早いのです。手をあげてさし招き乍ら呼びよせると、チヤリチヤリと小錢をたツぷり握らせて言ひつけました。

『辻占はみんなをぢさんが買ツてやるからな。その代りおまへの身體を貸しておくれ。もう少し經ツたらあそこのお醫者のうちの內玄關か裏の方から、女がふたりこツそりと出て來るからな、出たらすぐに知らせておくれ』

『見張りをするのかい』

『さうよ。なかなか分りがいい。だから向うに見つからねえやうにしなくちやいけねえぜ。をぢさんは、ほら、みろ、そこの川の中に小船があるだらう。あの中に寢てゐるから、萬事拔からねえやうにやるんだぜ』

『あい來た。分ツたよ。出て來たら合圖にあのうちの前の土手でちやうちんを振るからね。すぐに來ておくれよ』

小猿のやうに飛んでいッたのを見送り乍ら、つなぎ捨ての小船の中へおりて行くと、身を忍ばせて合圖を待ちうけました。

事ここに至ツては、傳六ももう鳴りどころの騷ぎではないのです。船へ這入るから十手にうねりを打たせて、今か今かと目を皿にし乍ら待ち構へました。

のび上り、のび上り、待ちわびてゐるうちに、四半刻、半刻と夜が沈んで、次第にしんしんとふけ渡りました。家の灯もまた一軒々々と消えていッて、ふはり、ふはりと襟首をなでる夜風の氣味わるさ。ぱッたりと人影もなくなりました。

もうそろそろ合圖があッてもいい頃です。

と思ッた刹那――ちらちらとはげしく土手の向ふで灯が動きました。

『それ來たぞ！　さあ來い！　お櫃娘、すべッて川におッこちますなよ！』

パッと蝙蝠のやうに飛び出した傳六のあとから、ひたひたと名人も足音ころして追ひかけました。

『どッちだ！』

『あそこ！　あそこ！　あの塀角を左へ曲ッて行くふたりがさうですよ』

手柄顔に辻占賣りが指さした闇の向ふを見すかすと、なるほど二ッの黒い影が急いでゐるのです。

ふたりともにすッぽりと、お高僧頭巾でおもてをかくしてゐたが、前を行くやさ形のすらりとした影こそは、まさしくあの娘の千萩でした。しかも噂の通り、大きなお櫃をかゝへてゐるのです。

『懐剣を持つてゐるな』

『懐剣！』

『あのうしろを守ッて行く女中の恰好をみろ。左手で胸のところをしッかり握ッてゐるあんばい

は、たしかに懐剣だ。どうやらこいつは思ひのほかの大物かも知れねえぜ』

ぴんと、名人の胸先に閃いたのは。――血！　血！　血！　あの軸物に降るいぶかしい生血のことでした。

娘のかゝへてゐる不思議なお櫃は、血を入れるお櫃かも知れないのです。うしろの女中の懐剣は、その血をとりに行く懐剣かも知れないのです。

生き血を盗みに行く娘。

犬の血か？　人の血か？

左右をすかしつ、見つつ、人目を恐れるやうにひたひたと急いで行く容子は、ともかくもなにか大きな秘密を持ッてゐるに違ひないのです。

『大事なドタン場だ。聲を出したらしめ殺すぞ』

『だ、だ、だ、大丈夫。なんだかへんなこころもちになりやがッて、出したくとも、で、で、出ねえですよ……』

ふるへ聲にもうちゞみあがッてゐる傳六を隨へ乍ら、注意深く影を隠してふたりのあとをつけました。

五

ひと曲り、ふた曲り、三曲りと曲ッて、忍びに忍び乍ら、ふたつの影は、通り新石町を眞ッ直に柳原へかゝりました。

右は籾倉、左は土手。

さびしいその柳原堤に沿ッて下ると、和泉橋です。櫃をかゝへた影を先に、二三尺離れて女中の影がこれを守り乍ら、ふたりの女は、その和泉橋からくるりと左へ折れました。

同時のやうに、ふたりは、にはかにあたりへ注意を配り始めましたが目ざした場所が近づいた證據なのです。

と思ふまもなく、ふたつの影は、そこの松永町の横通りを這入ッた福仙寺の境内へ、ひらひらと吸はれるやうに駈けこみました。

『ちくしやう。墓だ！　墓だ！　新墓をあばいて、死人の血を絞りに來たにちげえねえですぜ』

『黙ッてろい。喋舌らねえといふ約束ぢやねえか。聞えて逃げたらどうするんだ』

『だ、だ、だまッてゐてえんだが、あんまり氣味のわりい眞似ばかりしやがるんで、ひとりでに

音が出るんですよ。埋めたばかりの死人なら、血の一合や二合絞り取れねえッてえ筈はねえんだ。きッと、新墓を狙ひに來たんですぜ』

だが、ふたりの這入ッていつたところは、意外なことにも本堂なのです。しかもここへ來ればもう大丈夫と、言はぬばかりに足音さへも高めて、須彌壇の横からどんどん奥へぬけると、勝手知ッたもののやうに、ガラガラとそこの網戸をあけ乍ら位牌堂の中へ這入ッていッて、ぴたりとまた戸をしめ切りました。

中にはうすぼんやりとお燈明が二ッ點ッてゐるのです。戸もまた板戸ではなく網戸なのです。のぞけば網目を通して、おぼろげ乍らも中の容子が見られたが、しかし、うッかりのぞいたらこちらの顔も見つけられる危險があるのです。のぞきたいのをこらへてふたりはそこへ蹲まり乍らぢッと息をころして聞き耳立てました。

同時のやうに、娘の千萩のほそくなまめかしい引き入れられさうな聲が耳を刺しました。

『お待ちかねでしたでせう。千さま。もういいですよ。早くいらッしやい……』

『……』

『いいえ。大丈夫。誰も見ちやゐないから、怕いことなんぞありませんよ。えゝ、さう、――さ

う、まあかはいらしい。わたしに挨拶していらッしやるの。長遊びしちやいけませんよ。早く歸ッていらッしやいね……』

聲と一緒に、スル、スル、とかすかな衣ずれのやうな音がありました。

右門主從は、思はず息を呑みました。のぞきたいのをけん命にこらへて、ぢッと耳をすまし乍ら中の氣勢を窺ひました。

と思ふまもなく、カタコトと、位牌でもが動くやうな物音があがりました。同時に、チウチウと、まさしく鼠の啼きもがきでもするやうな異樣な聲が傳はりました。あとから千萩のすき透るやうな聲がまた耳を刺しました。

『まあ。お手柄々々。千さま。お見事ですよ。もういいでせう。早くいらッしやい。來なければ叱りますよ』

刹那です。名人主從は、引き入れられるやうなその聲に釣られて、われ知らずにさッと身を起しました。しかし同時に、右門も傳六も、思はずぞッと、身の毛がよだちました。

蛇です。蛇なのです。大きな鼠をあんぐりと咥へて、位牌の間から長い鎌首をぬッと擡げ乍らのぞいてゐるのです。

今しがたチウチウと、啼きもがいたのは、實にその鎌首が咥へてゐる鼠なのでした。なまめかしい聲で今、千萩が話をした對手もその蛇なのでした。お櫃の中の正體もまたその長蟲なのでした。

蛇を飼ふ娘！

蛇と話をする娘！

意外な秘密を隱してゐた奇怪なお櫃は、意外な謎を生んだのです。とみるまに長蟲はあんぐりと鼠を咥へたまゝで、ぬるぬると千萩の足元へ這ひよると、なにかの化身のやうに鎌首を擡げ乍ら、黑光りしてゐる長い身體をその足へしきりとすりつけてゐたが、そのまゝするするとお櫃の中へ這ひこみました。

傳六は元よりのこと、さすがの名人も全身粟つぶ立ッて、そこへ立ちすくんだまゝでした。それにしても、あの床の間へ降ッた血の出どころが不思議です。櫃に隱れた今の蛇が降らせるとも思へないのです。

しかし、そのとき釘づけになッたやうに立ちすくんでゐるふたりをおどろかして、突然、庫裡の向うから、バタバタと人の足音が近づきました。ふたりは、はッとなッて須彌壇の横へ身を隱

すと、怪しみ乍ら近づいた影を見すかしました。

年は二十三四。寺の者ではない、町人でもない、侍でもない、なにものか皆目素性の分らぬ不思議な若い男なのです。なにを憤ッてゐるのか、憤怒に目を光らして、荒々しく位牌堂の中へ飛び込んで行くと矢庭に千萩をにらみつけ乍ら、あびせました。

『きゝ分けのないお方でござりまするな！　あれほど言ッたのにまだおやめなさらないのでございますか！』

『……』

『こんなものを飼へば、こんな氣味のわるいものを飼ッたら、なにが面白いのでございます！　どこが可愛いのでございます』

詰るやうに言ッたのを、しかし千萩はひとことも答へないで、悲しげに微笑し乍ら、取り合ふのも煩らはしさうに目をそらしました。

なにかふたりの間に、祕密のつながりがあるに相違ないのです。もうためらッてゐる場合ではない。ひらりと湧き出たやうに姿を見せると、默ッて近づいて默つて名人は千萩の前に立ちふさがりました。

『あッ。あなたは！……。あなたさまは！……』

『右門でござる。さきほどはお宅の二階でお騒がせいたしましたな』

不意を打たれて千萩は、眞ッ青に色を變へると、なによりもと言ふやうに、うろたへ乍ら足元のお櫃に慌てて蓋をさせました。しかし、もうおそいのです。名人の射るやうな聲と目が、不氣味に笑ッてその胸を貫ぬきました。

『始終の容子はのこらず見せて頂きました。飛んだによろによろとした隱し男をお可愛いがりでござりまするな』

『ではもう……、ではもうなにもかも……』

『きゝもいたしましたし、詳しく拜見もいたしましたゆゑ、ここらが汐時とお邪魔に出て來たんでござんす。蟲も殺さぬやうなお美しいお顏をしておいでなすッて、あんまり人騒がせをするもんぢやござんせんよ。今聞きや、こッちのこの若いお方と、なにか曰くがありさうでござんすが、なにを一體どうしたといふんでござんす。あれほど言ッたのに、まだやめないかと、大變こちらがお叱りのやうでしたが、この方は一體どういふ係り合ひのお方なんです』

『……』

『え？　お嬢さま！』

『……』

『じれッたいね、むッつりの右門と言はれるあッしが耳に入れて、この通りによろによろと這ひ出して來たんです。櫃の中の大將に比べりや鎌首も短けえし、身體も短けえが、目はもッと光ッてゐるんだ。手間を取らせねえ方がおためですぜ。え？　お嬢さん！　はきはき言つたらどんなものでござんす』

たゝみかけた言葉に、千萩はわなわなと身をふるはせてゐたが、突然、おもてを伏せると、しみ入るやうな聲をあげてすゝり泣き出しました。

きいてゐて、右門といふことに氣がついたと見えるのです。横から不審な若い男が割ッて這入ると、これ幸ひといふやうに口を挾みました。

『わたくしが申しませう。あなた様なら大事ございますまい。その代り、くれぐれも御内密に願みますぞ』

『そなたも何もかもご存じか』

『知ッてゐる段ではございませぬ。その女は、千萩は、なにをかくしませうこのわたくしの妻たるべき女でございます』

『お許婚か！』

『さうでございます。どういふお詮議で奎町の父の方へ參られましたか知りませぬが、手前はあの岡三庵の倅でございます。血を分け合つたひと粒種の三之助と申すものでございます』

『なに、御子息！――なるほど、さうか。道理でさきほど家族しらべをした折、ほかに子はない。この娘ひとりきりぢやと、しどろもどろに言ッた容子が、ちとをかしいと睨んでをッたが、やッぱり隱し子がありましたな。血を分けた實の倅が家を出て、許婚の女が娘同樣家にをるとは何ぞ深い仔細がござらう。それがききたい。どうしてまたそなた家を出てをるのぢや。夜遊びでも昂じて、勘當でもされましたか』

『滅相もございませぬ。それもこれもみんな因はと言へば、千萩のこの氣味のわるい病氣ゆゑでございます。かうなりますればもう千萩の素性も申しませうが、この女は、わたくし父の三庵が書生のうちから可愛がられて、今のやうな醫業を授けて頂いた大切な先生の、御師匠さまの忘れ形身なのでございます。年をとッてからこの千萩を儲けて、まだ成人もせぬうちに御他界なさいましたゆゑ、父の三庵が子供同樣にして引きとり、わたくしとも許婚の約束を取り交はし、四年

前まで一ツ家に育ツて來たのでござりまするが、何の因果か、千萩めがちひさいうちから、こんなものを、こんな氣味のわるい長蟲を可愛がツて、晝も夜もそばを離さないのでござります。それゆゑ――』

『そなたが嫌ツて家出をしたと申されるか』

『ひと口に申さばさうなんでござります。一匹や二匹ではござりませぬ。多いときは七匹も八匹も飼ツて死ねばとツかへ、とツかへ、またどこからか手に入れて、あげ句の果には、夜一ツふとんへ抱いて寢るやうな始末でござりましたゆゑ、ほかの生き物とは違ふのぢや、人の嫌ふ長蟲なのぢや、いいかげんにおやめなされと、口のすツぱくなるほど諫めたのでござりまするが、どうあツてもきゝ入れないのでござります。父から叱ツて貰ひませうと、父に申したところ、その父がまた一向にわたくしの味方となツてくれないのでござります。たはけを申すな。誰のお嬢さまと思ツてをるのぢや、わしにとツてはかけ替へのない御恩人の娘ぢや、先生の娘ぢや、お師匠さまの忘れ形身ぢや、わしがいち人前の醫者になれたのもみんな千萩どののおとう樣の賜物ぢや、恩人の娘に意見が出來るか、馬鹿者、ほかの男を抱いて寢るとでもいふなら格別、長蟲を可愛いがる位、我慢が出來なくてどうなるのぢや、おまへが嫌ならたツて添ひとげて貰はなくともいい、

ほかから養子を迎へて、千萩に跡目を繼がせるから、氣に入らずばどこへでも出て行けと、實の子のわたくしを却ツて叱りつける始末なのでござります。くやしいのをこらへて、三度、五度と千萩にも頼み、父にも頼みましたが、一向にわたくしの言ふことなぞ取りあげてくれませぬゆゑ、えゝままよ、恩ぢや、義理ぢや、先生の娘ぢやと、他人の子を我まゝ一杯に育てゝ、實の子を袖にするやうな親なら勝手にしろとばかり、家を飛び出し、こツそりと長崎へくだツて、今日が日までの丸四年、死に身になツて醫業を勵み、どうにかかうにかいち人前の醫者となツて、つい十日ほどまへにこツそりまた江戸へ歸ツて參ツたのでござります。歸ツて來て、それとなく千萩の容子をみまするとこの通りだんだんと年頃になツてはゐるし、四年まへとは打ツて變ツてどことなう――』

『美しくなツてゐたゆゑ、また未練が出て來たといふのぢやな』

『お恥しうござります。未練と言へば未練でござりまするが、許婚の約束までした女ぢや、他人に奪られたうはない、けれども氣味のわるい長蟲はいまだにやめぬ。――どうしたものかと迷ツてゐた矢先、幸ひなことにここの寺は手前たち一家の菩提寺なのでござります。千萩がまたこの寺へ毎夜々々蛇の餌の鼠取りに來ることを嗅ぎ知りましたゆゑ、こツそりとこの寺に寢泊りして

をりまして、この通り、毎夜毎夜頃合ひを見計らッては意見に來ますけれど、千萩は對手になッてもくれないのでございます。こんなもののこんな長蟲のどこが可愛いいのか。く、くやしくてなりませぬ。千、千萩めが、うらめしうてなりませぬ……』

美しいだけになほ一倍千萩の長蟲いぢりがくやしくてならないとみえて、三之助はじわりと目がしらへ涙さへ泛べ乍らうらめしさうに、足元のお櫃をにらみすゑました。目をおほひおもてを伏せて、千萩も消え入りたげな忍び音をあげ乍ら、しくしくと泣き入りました。

意外な祕密が隱れてゐたのです。

しかし、それにしても床へ降ッたあの血が奇怪でした。誰が降らしたか、千萩か？　それとも三之助か――殘ッた謎はそれ一ッなのです。名人の冴えた聲が、突然、抉るやうに襲ひました。

『憎いか！　三之助！』

『は……』

『千萩は憎いかときいてをるのぢや』

『こ、戀しうございます。いいえ、うらめしうございます。こんなに想ふてをるのに、人の心を知らない千萩が只々うらめしうございます。……いいえ！　いいえ！　千萩よりも父が憎い！

親が憎い！　實の子をすてても他人の子を庇ふやうな、父が、親が、もッともッとうらめしうございます……』

『さうか！　親が憎いか！　父がうらめしいか！――では、おまへだな！』

その恨めしさのあまりにやッたいたづらに違ひないのです。名人の聲が、刺すやうに三之助の胸をつきゑぐりました。

『隱しても目は光ッてゐるぞ！　おまへがあんないたづらしたんだらう！』

『氣、氣味のわるい。不意に何でございます！　あんないたづらとは何のことでございます』

『白ッぱくれるな！　父が憎い、親がうらめしいと今その口で言ッた筈だ、他人の子を庇ふて自分を追ん出した腹いせに、あんないたづらをしたんだらう！』

『な、な、なんのことでございます！　一向手前には分りませぬが、何をお疑ひなさッてゐるんでございます』

『血だ！　床の間へ降らしたあの血のことなんだ！』

『血！　床の間の血？……』

ぎよッとなッて、おどろきでもするかと思ひのほかに、三之助は怪訝さうな顏をしてゐるので

す。ばかりか、まあどうしたんでござりませう、――と言ふやうに、そばから千萩もおもてをあげて、泣きぬれた目を睜りました。

名人もいささか圖星がはづれて、意外さうにふたりの顏を見比べました。目のいろ、顏のいろ、三之助に嘘はない。千萩にも疑はしい色は見えないのです。それのみか、急に三之助が、いとしくなりでもしたやうに、濡たひとみへ、情熱の光りをたたへて、微笑すらも交はしてゐるのです。

『へへえ……。飛んだ長いしッぽがお櫃の中から出たかと思ッたら、またによろりと隱れて了ッたか。――どうやらこいつあ難物だよ。來い！　兄哥！　なにをまごまごしてゐるんだ』

『へ？……』

『へぢやないよ。新規蒔直し、狂ッたことのねえ眼が狂ッたから、出直さなくちやならねえと言つてるんだ。まごまごしねえでついて來なよ』

『まごまごしてゐるのはあッしぢやねえですよ。馬鹿々々しい。旦那こそまごまごしてどこへ行くんですかよ。そんなところは出口ぢやねえです。木魚ですよ。外へ出るならここをかう曲ッてこッちへ出るんですよ』

どこに出口があるか、どッちへ道が曲ッてゐるか、霧の中をでも歩くやうなこころもちで、名

人はしんしんと考へこんだまゝでした。

不思議は不思議につゞき、不氣味は不氣味につゞいて、しかも血の謎は、愈々深い迷霧の中へ這入ッて了ッたのです。

家族以外の者？……、いや斷じてそんな筈はない。丹念にあのとき調べた通り、外からあの二階へ這入りうる足場は皆無でした。家人の目をくらまして押し入つたら格別、でない限りは、どうあッても岡三庵一家のものに違ひないのです。しかし、その家族のものは、宵のあの裏返へしで試した通り、書生、代診、母親、女中、誰ひとりそれと疑はしい顏いろさへ替へたものもないのでした。僅かにひとりあッた娘の千萩は、血を降らすどころか、生き血を吸ひたがる飛んだ長蟲を飼ッてゐたのです。あのときあんなにふるへたのは、その祕密を知られたくないために、われ知らず脅えたに違ひないのです。しかもその祕密の長い尾につながッてゐた三之助も、あの目、あのいろ、あの容子では、どこに一ツ、疑はしいところはないのでした。謎の雲は、はてしもなく深くなッたのです。

考へ迷ひ、考へ迷ッて、いつどこを歩いたとも知らないやうに歩いて來た名人は、ぴたりとその和泉橋のうへに立ち止ると、釘づけになッたやうに佇ずんだまゝ、しんしんとまた考へこみ

ました。

六

夜もまた全くふけ渡ッて、星もいつのまにか消えたか、深夜の空は真ッくらでした。影もない。音もない。思ひ出したやうにざわざわと吹き渡る川風が、生あッたかくふはりふはりと、人の息のやうに襟首をなでて通りました。

遺恨あッての仕業か？　いたづらか？……。

それすらも分らないのです。つかみどころがないのです。

思ひ出したやうにまた川風が、ふはりふはりとなでて通りました。あざけるやうに橋の下で、ぴちやぴちやと川浪が鳴りました。

名人はしんしんと考へつゞけたまゝでした。

考へてゐるうちに、しかし、名人の手はいつのまにか、そろりそろりとあの頃をなで始めました。

刹那です。

『アハハハ……。何でえ。つまらねえ。あんまり考へすぎるから事がむづかしくなるんだ。手はいくらでもあるぢやねえかよ。馬鹿々々しい。アハハ……。アハハ……』

噴きあげたやうに、突然大きく笑ひ出したかと思ふと、さわやかな聲がのぼりました。

『ねえ、兄哥！』

『……』

『兄哥と言ッてるんだ。ねねえのかよ。傳六』

『ね、ね、ねるんですよ。ここにひとりをるんですよ。氣味のわりいほど考へこんでゐッたんでどうなることかとこッちも息を殺してゐたんです。ゐたらいきなり、パンパンと笑ひ出したんで、氣が遠くなッたんですよ。あッしがここにをッたら、なにがどうしたといふんです』

『どうもしねえさ。岡の三庵先生は何商賣だッたッけな』

『醫者ぢやねえですかよ』

『醫者なら血があッたッて不思議はねえだらう』

『誰も不思議だと言やしませんよ。おできも切りや、血の出る傷も手當をするのがお醫者の一ツ藝なんだ。醫者のうちに血があッたら、なにがどうしたといふんですかよ』

『血をいぢくるが稼業なら、血を始末する甕か桶があるだらうと言ふのさ。どう考へたッてあの床の間へ降ッた血は外から忍びこんで來たいたづら者の仕業ぢやねえ、たしかにあの家の者がやッたにちげえねえんだ。その血も十中八九、桶か甕に溜めてある病人の血を塗ッたものに相違あるめえといふんだよ。だから血甕に餌を垂れに行くのよ。ついて來な』

『餌？……』

『變な聲を出さなくともいいんだよ。さういふまにもまた今夜血を降らされちゃ事がめんだうだ。早いこと餌を垂れておかなくちゃならねえから、とッととついて來な』

なにか目さましい右門流を思ひついたとみえるのです。飛ぶやうに夜ふけの街をぬけて岡三庵の屋敷通りの塗町へ曲ッて行くと、軒を揃へてずらりと並んでゐるそこの塗屋の一軒へづかづかと近づいていッて、いつにもなく御用名を名乘り乍らどんどんと叩き起しました。

『八丁堀の右門ぢや。御用の筋がある。早くあけろ』

慌てうろたへ乍ら丁松らしいのがあけたのを待ちうけて、ずいと中へ這入ると、矢庭に不思議な品を求めました。

『生うるしがあるだらう。なにか小壺に入れて少しよこせ』

塗町とまで名のついた町の塗屋なのです。生うるしがない筈はない。何ごとかと言ふやうに筆まで添へて、小壺に入れ乍ら持ッて來たのを片手にすると、そのまゝさッさと岡三庵の屋敷まへへ取ッてかへしてせき立て乍ら傳六に命じました。

『おめえの一ッ藝だ。早えところ血甕のありかを探して來なよ』

『……？』

『なにをまごまごしてゐるんだ。内庭か、外庭か、どッちにしても外科部屋の近所の庭先にちげえねえ。あり場所さへ分りやおいらがちよいとお呪ひするんだ。大急ぎで探して來なくちゃ夜があけるぢやねえかよ』

ひねり、ひねり、横路地のくぐり木戸から這入ッて行くと、中塀を乘り越えてでもゐるとみえて、暫くガサガサといふ音がつゞいてゐたが、ぽッかりとまた顏をのぞかせると、息をころし乍ら名人の袖を引きました。

傳六一ッ藝の名に恥ぢず、中塀を乘り越えていつてみると、案の定、内庭と外庭との境ひになッてゐる外科部屋の小窓下に、狙ひをつけたその血甕があるのです。蓋をあけてみると、中はぐッちやり、……睚い異臭がぷうんと鼻を刺しました。

『このどろりとした奴をちよツぴり棒切れにでもつけていきや、床の間にだツて天井にだツて自由自在に血が降らあ。では一ツ右門のえびで鯛を釣らうよ。そツちへどきな』

今のさき求めて來た用意の生うるしを筆にしめすと、何を思ツたか血甕のその蓋のつまみ柄のまはりへぺたぺたとぬりつけました。それだけなのです。

『さあ出來た。ねぐらへ歸ツていい夢でも見ようぜ。きよときよとしてゐると置いて行くよ……』

居合斬りのやうな鮮やかさでした。鳴るひまも、ひねるひまも、聲を挾むすきさへないのです。

・さツさと風のやうに八丁堀へ歸ツて行くと、ぶつぶつと口の中で何か言ツてゐる傳六を尻目にかけ乍ら、ふくふくと夢路を急ぎました。

と思ふまもなく明けるに早い春の夜は、夢いろの曉にぼかされて、しらじらと白み初めました。同時です。バタバタといふ足音が、東雲の道にひゞいて、表の向うから慌たゞしく近づきました。

『釣れたな！……』

ぐツすりと眠り落ちてゐたかと思ツたのに、さすがは名人右門、心の耳は起きてゐたのです。足音の近づくと同時に、ガバと起きあがツて待ちうけてゐるところへ、三庵の家の下男が、案内

も乞はず内庭先へ飛び込んで來ると、密封の一書を投げこみ乍ら、そのまも急ぐやうにせき立てました。

『すぐさまお運び願へとのことでござりました。なんでござりまするか、委細は手紙の中にしたためてあるさうでござりますゆゑ、お早くお出まし願ひます』

うろたへた文字で、走り書きがしてあるのです。

『奇怪千萬、またまた生血が降り候。但し軸物には候はず、念の爲にと存じ、昨夜は床の物取りはづし置き候ところ、只今見れば壁に二ケ所、床板に三ケ所、ぺッたりと血のしたたり有之候。御足勞乍ら、今一度御檢分願はしく、御來駕待ちわびをり候』

讀み下し乍ら、靜かな笑みをみせると、ふりかへッて、傳六を促しました。

『大鯛が釣れたやうだぜ。早くしやッきりと立ちなよ。なにをぼうッとしてゐるんだ』

『ガミガミ言ひなさんな。へんなことばかりなさるんで、枕元へ坐ッて旦那の寢顏をみてゐたら頼みもしねえのに夜があけちまッたんですよ。ひと晩寢なきや誰だッてぼうッとなるんです』

『呆れた奴だな。寢ずの番をしてゐたッて、夜が明けなきあ魚は釣れねえんだ。ゆうべぬッたらるしが物を言ッてるんだよ。目がさめるから飛んで來な』

聲も早いが足も早い。朝風ぬるい街から街を急いで、塗町角の三庵屋敷へ這入ッて行くと、床の血でもしらべるかと思ひのほかに、そんな氣ぶりもないのです。内玄關先へ出て待ッて、青さめふるへてゐた三庵の姿をみると、矢庭にズバリと命じました。

『手を見たい。家の者殘らずこれへ呼ばッしやい』

『手？……手と申しまするとの？』

『文句はいりませぬ。言ひつけ通りにすればいいのぢや。早くこれへひとり殘らず呼ばッしやい』

いづれもいぶかり乍ら、書生、代診、下男、下女、殘らずの雇人たちが、ぞろぞろと出て來ると、左右から手の林をつくッて名人の目の前にさし出しました。ちらりと見たきり誰の手にも異狀はないのです。あとからゆうべのあの千萩が、おもはゆげに姿を見せると、そこの衝立のかげから、白い美しい手を恥しさうにさし出しました。しかし、異狀はない。――あとにつゞいて母親が姿を見せました。

ちらりと見ると、その左手に白い布が卷いてあるのです。刹那でした。鋭く名人の目が光ッたかと思ふと一緒にゑぐるやうな聲がその顏を打ちました。

『その手はうるしカブレでござらう』

ぎよッと色を替へて、うろたへ乍ら隱さうとしたのを、しかしもうおそいのです。名人が莞爾と大きく笑ひ乍ら手を振るやうにして雇人たちを追ひやッて、先づ祕密の壁をつくッておくと、靜かにあぶせました。

『これが右門流の釣り餌だ。よくお分りか。ゆうべおそくにわざわざやッて來て、こッそりとその血甕の蓋へうるしを塗ッておいたんだ。その蓋に障ッたからこそ、その通りうるしにカブレたんでござらう。なに用あッてあの血の甕の蓋をおあけなすッた』

『……』

『言ひませぬな！　情も水物、吟味詮議も水物だ。手間を取らせたらいくらでも啖呵の用意があるんですぜ。只の用であの甕の蓋へ障ッたんではござんすまい。たびたび二階の床の間へ血が降ッてゐるんだ。そのうるしカブレが何より生きた證據。すッぱりとネタを割ったらどうでござんす』

『わ、分りました……、なるほどよく分りました。この證據を見られてはもう隱し立てもなりますまいゆゑ申します……、申します……』

名人に責め立てられてはと、覺悟が出來たと見えるのです。たへかねるやうにそこへ泣き崩折

れると、老いたる母親は涙にしやくりあげ、しやくりあげ祕密を割りました。

『も、申しわけございませぬ。人騒がせのあの血を時いたのはいかにも手前でございます。それもこれもみんなこの貰ひ子の娘ゆゑ、いいえ、實の子に跡をつがせたい親心の迷ひからでございます。お知りかどうか存じませぬが、どうした星のせゐか、この千萩が人の嫌ふ長蟲を弄ぶくせがございまして、倅の三之助がこれを忌み嫌ひ、家出して了ッたのでございます。父親は恩ある人の娘ぢや、他から養子を貰ふて跡をつがせるゆゑ歎くに當らないと、このやうに申しますなれど、わたくしから見れば三之助は腹を痛めた實の倅、人の噂にきけば長崎で醫者の修業を終へてこッそりと江戸へ歸つた由、――さぞや倅も千萩と添ひたからう、跡目をつぎたからうと、親ゆゑに胸を痛めて、出來るものなら千萩に長蟲遊びをやめさせようと、たびたび父親にせつきましたなれど、頑としておきゝ入れがないのでございます。ばかりか近いうちに千萩の養子を取り決めるやうな口ぶりさへ洩らしましたゆゑ、女心の淺墓さに、いッそ悪い噂をこの家に立てさせてと存じ、あのやうに床の間へ血を降らせたのでございます。さすればいつかは人の口の端にも傳はり、あそこは幽靈屋敷ぢや、血が降るさうぢやと噂も立ちませうし、立てば養子に來てもない道理、來てがなければやがては實の倅の三之助も跡を繼がれる道理と、親心から

ついあのやうな人騒がせをしたのでございます。――お察し下さりませ。千萩はいかにも恩ある人の娘ではございまするが、やッぱり他人、三之助は實の倅、出來るものなら、出來ることなら實の子に跡を繼がせたうございます……。それが、それが、子を持ッた親の心でございます……』

意外にも事はやはり千萩の長蟲遊びにかゝはッてゐたのです。しかも親ゆゑの子を思ふ親心ゆゑに血を降らしたといふのです。――名人の目にはさわやかな微笑と共に、かすかな雫の光りが見えました。

『さうでございたか！　よくおこころもちが分りました。なにも申しますまい。――蹴はッたが縁ぢや。手前、取計らッて進ぜよう。千萩どの！』

最後まで心遣ひがゆかしいのです。おどろきと悲しみに打たれ乍ら衝立のかげにしょんぼりと佇ずんでゐた千萩のそばへ歩みよると、しづかにさとすやうに聲をかけました。

『長蟲の肌なぞより、人の心は、人の肌はもッとあたたかい。そなた、三之助どのがいとしうはございませぬか』

『……』

『アハハ……。眞赤におなりぢやな。首のそのもみぢでよく分りました。三之助どの、千萩どのは

三之助どのが嫌ひではないさうぢや。お早く駕籠の用意をさツしやい。行くさきは松永町の正福寺』

聲も出ないほどに三庵が打ち喜んで、騒がしく乘物の用意をさせ乍ら迎ひに出さうとしたのを、

『いや、待たツしやい。乘せて行くものがござる。夫婦和合にあのお櫃は禁物ぢや。寺へ屆けたら、あの長蟲の始末は和尚がねんごろにして下さりませうゆゑ、三之助どのと引換へに迎へておいで召されい。千萩どのもたんと人肌にあやかりなさいませよ……』

『えへへ……、人肌たア、うめえことを言ツたね。ちくしやう。やうやく今になツて音が出やがツた』

『おそいや。おまへが鳴らなくて、いつになく靜かでよかッたよ。それにしてもおいらとおまへは出雲の神さ。ざらざらしてちッと氣味がわるいが、ほかになでる人肌はねえ。おまへの首でもなでてやらあ。こッちへかしなよ』

くすぐつたさうに首をすぼめた傳六と肩を並べ乍ら、爽々颯々と吹く朝風の中へ急ぎました。

山雀美人影繪

一

その第三十八番手柄です。

『御記錄係り！』

『はッ。控へましてござります』

『御陪席衆！』

『只今……』

『御苦勞でござる』

『御苦勞でござる』

『みな揃ひました』

『のこらず着席いたしました』

『では川西萬兵衛、差し出がましうござるが吟味仕る。――音藏殺し下手人山雀お駒、こゝへ曳かッしやい』

『はッ。所得ました。――淺草宗安寺門前、岩吉店山雀使ひお駒、お呼び出しでござる。早々これへ出ませい……』

しいんと呼び立てた聲が谺のやうにひゞき渡ッて、滿廷、水を打ッたやうでした。春もここばかりは春でない。――陽さしもまどろむ午さがり、南町奉行所奥大白洲では、今、與力、同心、總立ち合ひの大吟味が開かれようとしてゐるのです。

『罪は淺草三番組蔦頭の音藏ごろし、下手人は今呼び立てた同じ淺草奥山の小屋藝人山雀使ひのお駒でした。――といふ見込みと嫌疑のもとにお駒を擧げたのはもうふた月も前であるが、調べるに從ッて下手人としてのその證據固めが崩れ出して來たのです。どんなに責めても、知らぬ存ぜぬと言ひ張ッて白白しないのがその一ッ、現場に落ちてゐた兇器證據品のドスはまさしく山雀お駒の持ち品であるが、殺されてゐた音藏の傷口は、まるで似もつかぬうしろ袈裟の刀傷でした。それが不審の二ッ、そのとき着てゐたお駒の下着の裾に血がついてゐたが、しかしその血もお駒の言ひ張るところに依ると、錢湯のかへりに躓づいてすりむいた傷からの血だといふのでした。

事實、そのすりむいた傷の痕も、いまだに膝がしらに殘ッてゐるのです。それが不審の三ッ。――拷問。慈悲落し、樣々に手を替へ品を替へて、この六十日間責めつゞけてみたが、頑としてロを割らないばかりか、肝腎の證據固めに曖昧不審な狂ひが出て來たために與力同心、殘らずがかくの通り立ち會ッて、最後の裁きをつけようといふのでした。

『お待ちかねでござるぞ。山雀お駒。何をしてゐるのぢや。早くこれへ出ませい！』

せき立てた聲に、運命を仕切ッたお白洲木戸が重くギイとあいて、乳懸繩のお駒が小者四人にきびしく護られ乍ら、よろめきよろめき現れました。

年はかッきり三十。六十日の牢住ひにあッては、奥山で鳴らした評判自慢のその容色も支へることが出來なかッたとみえて、色香はしぼり取られたやうに褪せ衰へ、顏はむくみ、血のいろは黑く青み、髪は赤くみだれてちゞれ、光るものはたゞ兩眼ばかりでした。

『だいぶやつれたな。慈悲をかけて遣はすぞ。膝をくづしてもよい。樂にいたせ』

しかし、樂に坐らうにも、今はもうその氣力さへないとみえて、精根もなくぐッたりとうなだれたところへ、證據の品のドスがひと口、そのとき着てゐたといふ長襦袢がいち枚、あとから鹽漬になッた音藏のむくろが、長い棺に横たはッて、しづしづと運ばれました。

物々しさ、業々しさ、總立會ひ總吟味の顏は並んでゐるが、六十日間責めつゞけて自白しないものを、證據の合はないものを、今さら責めてみたとて自白する筈もなければ、ないものをまた罪におとしたくも落しやうがないのです。吟味といふは名ばかり、調べといふも形ばかり、結局は只、無罪放免といふ最後の裁き一ツがあるばかりでした。隨ツて川西萬兵衞の吟味もまたほんの形ばかりでした。

『このうへ無益な手數はかけますまい。罪なきものを罪に陷し入れたとあツては、大公儀お町方取締の名が立ちませぬ。しかし乍ら念のためぢや。諸公方にもとくとお立會ひ願ふて、今いち度傷口を改め申さう。その匕首これへ――』

差し出したのと一緒に、左右から小者が鹽漬の寢棺に近づいて、こじあけるやうにし乍ら長い青竹で、晉藏のむくろの背を返しました。

しかし傷口に變りはない、どう調べ直してみても刀傷は刀傷です。肩から背へかけて、あんぐりと走ツた傷の幅は一寸、長さはざツと一尺二寸、尺にも足らぬ匕首では斬らうにも斬りやうのない見事な袈裟がけの一刀斬りでした。

『ご覽の通りでござる。晉藏が殺められてゐた場所は、淺草北松山町の火の見櫓下ぢや。時到は

宵五ツどき。お駒の住ひ岩吉店はその火の見の奥でござる。場所は近し、血によごれた匕首はむくろのそばにすててござるし、品はまさしくお駒の品でござるゆゑ、下手人をこの女と疑ふに無理はござらぬが、しかし乍ら肝腎の傷がご覽の通りぢや。立派な刀傷ぢや。この點疑ふべき餘地がない。御意見いかゞでござる』

『……』

『御異論ありませぬな。ござらねばさきを急ぎませう。――痴情なし、色戀なし、恨み、憎しみ、八方手をつくして詮議したところによると、これまでお駒と晉藏は他人も他人、顏を合はしたことはござツても、世間話し一ツ交はしたこともない間柄といふことぢや。知らぬ他人が何の恨みもない知らぬ男を殺めるなぞといふためしはない。この點も下手人としての嫌疑の崩れる急所でござる。御意見いかゞぢや』

『……』

『ありませぬな。然らば最後のこの血潮ぢや。捕り押へた砌り着用の襦袢にこの通り血の痕はござツたが、駒の申すには膝より發した血ぢやといふことでござる。――駒！　大切な場合ぢや。恥かしがツてはならぬぞ。充分に脛をまくツて、諸公方に傷痕をご檢分願はッしやい。誰か手傳

ッてまくッて遣はせ』

やはり膝には、すりむいたといふその傷あとが、いまだにうッすらと殘つゐるのです。

『かくの通りぢや。殘念乍ら證據固めが立たぬとすれば、無罪追放のほかはない。諸公方の御判斷はいかがでござる』

『……』

『ご意見はいかゞぢや！』

『……』

『どなたもご異論ございませぬか！』

『……』

『ありませぬな。――では川西萬兵衛、公儀のお名に依ッて裁き仕る。山雀お駒、有難く心得ろよ。長らく憂き目に遭はせて不憫であッた。上の疑ひは霽れたぞッ。立ちませい！　歸ッても苦しうない！　宿元へさがりませい！』

森嚴、神のごとき聲でした。一齊にざわめきのあがッた中を、さぞや打ち悅んで飛んでもかへるだらうと思はれたのに、しかし當のお駒は、力も張りも、精も根も、悅ぶその氣力さへも盡き

果てたものか、顏いろ一ッ變へず、にこりともせずに、よろめきよろめき立ちあがると、いかにも力なげにガックリとうなだれて、曳く足も重さうに、とぼとぼと出て行きました。

ちッとそれを見てゐたのが右門です。同役殘らずがもう席を立ッて了ッたのに、ぽつねんとただひとり吟味席の片隅に居殘ッて、頤をさすりさすり見送ッてゐたが、なに思ッたか、突然つかつかとお白洲へ飛びおりて、足元の小砂礫を拾ひとッたかと思ふと、

『えッ！』

突き刺すやうな氣合の聲と一緒に、お駒のうしろ影目さしてパッと投げつけました。――刹那、身に武道の心得ある者でなければ出來る技ではない。血も熱も冷え切ッて了ッた人のやうに、よろよろと歩いてゐたお駒が、一瞬にさッと身を躱して、きッとなり乍らふりかへると、

『おいたはおよしなさいませ……』

凉しい聲で嫣然と笑ひ乍ら、またガックリとうなだれてとぼとぼと表へ消えました。

『飛んだ喧はせものだ。またちッと忙しくなりやがッたな。――おうい、兄哥！　傳六！』

『ここにあり』

『見たか』

『まさに拜見いたしましたね。いい形ちでしたよ。つかつかと飛びおりる、さッと石を拾ふ。エッ、パッと投げて、大見得切ッて、ぴたりと決つた型は、先づこのところ日本一、葉村家かむッつり屋と言ッたところだ。うれしかッたね。胸がすうとしましたよ』

『そんなことをきいてゐるんぢやねえや。今のお駒のあざやかなところを見たかといふんだよ。千兩役者にしたッて、あゝ見事に舞臺は變らねえ。あの決ッたところ、さッとつぶてを躱したところ、きりッと體が締ッたところ、おいたはおよしなさいませと落ちついたところ、ヤットウ劍法、竹刀の稽古で叩きあげたにしても、先づ切紙以上、免許近けえ腕前だ。女に劍術使ひはあるめえと思ひ込でかゝつたのが目ちげえさ。あの體のこなしなら、袈裟がけ、一刀斬り、男一匹位えを仕止めるに造作はねえ。またひと手柄頂戴するんだ。早く支度しな』

『笑談ぢやねえ。それならなぜさッき横車を押さなかッたんですかよ。萬兵衞の旦那が、御意見はいかがぢや、御異論はござらぬか、と二度も三度も馬鹿念を押したんだ。あるならあるで、ハイ、先生、ございますと活潑に手をあげりやよかッたぢやねえですか』

『犬の顏にだッて裏表があるんだ。物を考へつくときにだつて、あともありやさきもあるよ。初めッから氣がついてゐりやほッちやおかねえや、今ひよいと思ひついたんで、急がしてゐるんだ。

とッとと駕籠を呼んで來な』

『いいえ、旦那、お默り！　なるほど犬の顏にも、裏表があるかも知れねえがね、よしんばお駒が免許皆傳の劍術使ひであッたにしても、庖丁はドス、そのドスが血によごれて、死骸のそばにころがッてをッたと、萬兵衞の旦那が詳しくご披露なすつたんだ。傷口が違ふんです。刄物が違ふんです。ドスの袈裟がけ匕首劍法の一刀斬りなんてえものは、傳六ヘソの緒を切ッてこの方耳にしたこともねえですよ。折角だがあッしや、異論のある口だ。文句があッたら活潑に手をあげてごらんなせえ』

『音止めにパッとあげてやらあ。うるせえ野郎だ。刀で斬ッて、目をくらますために、匕首をすてておくといふ手もあるぢやねえか。おいたはおよしなさいませと、あッさりやられたあのセリフが氣に入らねえ、にこりともしなかッた顏が氣に入らねえんだ。ついて來な』

ひと睨み、たッた一ッの小石のつぶてが、無罪放免、ほんの今籠から放たれたばかりのお駒の身邊に突如として思ひ設けぬ疑惑の雲をまた新らしく呼び起したのです。――風もゆたかな春深い日中の街を、右門を乘せた駕籠はぴたりと音の止まッた傳六を隨へて、ゆさゆさと、おうやうにゆれながら、淺草宗安寺門前の、北松山町を目ざして急ぎました。

二

勿論、北松山町を目さしたからには、お駒の住ひの岩吉店へ乗りつけるだらうと思はれたのに、しかし、探し探し訪れていッたところは、意外なことにも音藏の住ひでした。

人手にかゝッてふた月あまり、――存生中は、三番組鳶頭として世間からも立てられ、羽振りもよかッたにしても、死んで了ッてはさういつまでも同じ羽振りがつゞく筈はない。と思ひ乍ら這入ッていッてみると、こじんまりした住ひの表付から、中の工合不思議なほどになにもかもゆたかに光ッてゐるのです。

妻女が三ッ位の子を抱いてゐるのでした。

その妻女にも、少々不思議が見えるのです。殺された音藏は四十五といふ働きざかりであッたのに、妻女はおほかた二十も違ふほどの年下で、しかも色つやのつやつやした鹽梅、身だしなみのしやんとした工合、化粧こそはしてゐないが、着てゐるものから、肉づきのみづみづしてゐるあたり、夫を失なッた女のさびしさ、やつれ、落魄、と言ッたやうなところはみぢんも見えない若さでした。

そのうへに、氣になるものが長々と手枕をして、妻女の腰のあたりを嗅ぐやうな恰好をし乍ら寢そべッてゐるのです。年は三十三四、伊達に伸ばしたらしい月代が黒く光ッて、ほろりと苦み走ッたちょッといい男の、ひと目に御家人くづれと思はれるやうな二本差でした。――ぴかりと名人の目が、隼のやうに光りました。

『笑はしやがらあ。だから白洲の砂礫もはふッてみろといふんだよ。川西萬兵衞どんのお口上だと、痴情なし、色戀なし、恨みなし、憎みなし、音藏とお駒は赤の他人だ、他人と他人に刄傷沙汰はねえと見て來たやうなことをご披露したが、お駒音藏音藏お駒と一本道にふたりのつながりばかり狙ふから、實あ裏手にかういふ抜け道のあッたことが分らねえんだ。亭主が人手にかゝッて、空家になッたみづみづしい女のところへ、長い蟲が黒く伸びて寢てゐるなんて、お誂への圖ちやねえかよ。どうだえ、兄哥』

『何だ、貴樣は！　挨拶もなく他人のうちへぬうと這入ッて、なにをべらべらやッてゐるんだ。お誂への圖たアどなた樣に言ふんだ』

むくりと起きあがると、御家人男がふてぶてしくからみついて來たのです。

『誰に斷ッてこのうちへ這入ッて來たんだ』

『死んだ音藏にさ』
『ご番所の野郎か』
『然り』
『何用があるんだ』
『御用筋の通ッた御用があッて來たのよ。物を訊くがね。おまへさんはこのうちの何ですえ』
『親類だ』
『親類にもいろいろござんすぜ。父子兄弟、いとこはとこ、それからも一ッご親類といふ奴がな。あんた、そのどの字のつく方かえ』
『つかうとつくまいといらぬお世話だ。どの字をつけたきや氣に入るやうに勝手につけておきやいいぢやねえか。とにかくおれはここの親類だよ』
『さうですか。兎に角づきの親類なら、どの字のつく親類とあんまり遠くねえやうだが、まあいいや。それにしてもこのうちの暮しぶりは、ちッと金廻りがよすぎるやうだね。鳶のかしらと言へば、江戸ッ兒の中でも金の切れる方だ。宵越しの金を持たねえその江戸ッ兒の主人が死んで、もうふた月にもなるこん日、こんな贅澤暮しの出來るやうな貯へが殘ッてゐる筈アねえ。暮しの

金はどこから湧いて出るんですえ』
『いらぬお世話ぢやねえか。緣の下に小判の噴き出る隱し井戸がねえとも限らねえんだ。探して見たけりや天井なりと、床の下なりともぐッて見るがいいさ』
『きいた風なセリフを仰有いましたね。さういふご返事なら强ッてきゝますまいよ。お名は何て言ひますえ』
『知らねえや！』
『なるほど、名まへも知らねえ屋どのと仰有るか、よしよし、これだけ分りや澤山だ。傳六、河岸を變へようぜ。忙しいんだから鳴らずについて來なよ……』
しかし、鳴るなと言ッたとて、これが鳴らずにゐられるわけのものではない。忽ちその口が尖りました。
『馬鹿にしてらあ。あんまり無駄をするもんぢやねえですよ』
『無駄に見えるか』
『無駄ぢやござんせんか。あんな月代野郎に劍突を嚙まされて、スゴスゴと引揚げるくれえならわざわざ寄り道するがまでのことはねえんだ。お駒を煎じ直すなら煎じ直すやうに、早く締めあ

げりやいいですよ』

『そのお駒を締めあげるために無駄石を打ッてゐるぢやねえか。右門流の無駄石棄て石は、十手さき二十手さきへいッて生きて來るんだ。文句を言ふひまがあッたら、早えところお駒のねぐらでも嗅ぎつけな』

探していッたその傳六が、はてな、といふやうに首をかしげました。――音蔵の住ひからは僅かに三丁、六十日間も牢につながれてをッたら、さぞや留守宅も荒れすさんでゐるだらうと思ッてゐたのに、岩吉店の中ほどで見つけたお駒のその住ひは表付、中の工合、打ッて變ッてこざッぱりとなにもかも整ッてゐるのです。

ばかりか、ぬッとあがッていッた右門も傳六も、等しくおどろきに打たれて、あッと目を睜りました。

實にそッくり、實に瓜二ッと言ひたいほどもそッくりそのままの男が、そッくりな恰好をして、お駒の腰のあたりを嗅ぐやうにし乍ら、手枕も楽さうに長々と寢そべッてゐたのです。年も同じやうに三十三四、顔立ちもまた苦み走ッてちよッといい男の、背もそッくり、肉付もまたそッくり、只變ッてゐるところはその月代のあるなしと、武士と町人との相違でした。あッちは黒々と

伸びてゐたのに、こッちは青々と剃りあげて、あッちはみるからふてぶてしい御家人風だッたのに、こッちは蔦の者か職人か、こざッぱりとイナセな兄哥風でした。

しかも同じやうにむッくり起きあがると、同じやうにからみついて來たのです。

『どこの野郎だ。なにしに來やがッたんだ』

『……』

『默ッぬッと這入ッて來やがッて誰に斷わッたんだ』

『似たやうなことを言ふな。おまへはここのうちの、何に當るえ』

『いらぬお世話ぢやねえか。親類だよ』

『なるほど、やッぱり親類か。親類にもいろいろあるが、どんな親類だ。おまへもこの字のつく親類筋の方かえ』

『どんな筋の親類だらうといらぬお世話ぢやねえか。この字とやらをつけたきや勝手につけておくがいいさ』

まるでそッくりな言ひ草でした。あッちで同じことを聞かれたことも知ッてゐて、同じことをまたあッちで答へたのも知ッてゐて、わざと白ばくれ乍ら同じ返事をしてゐるやうにさへも見え

るのです。

名人の目が、ぴかりと光ッて、傳六のところへ合圖を送りました。察したか傳六、風のやうな早さです。まッしぐらに飛び出していッたのを、不思議な男がまた實に奇怪でした。早くも何の合圖か、察しをつけたとみえて、さッと立ちあがると、さき廻りをしようとでもするやうに、バタバタと裏口から駈け出しました。

いぶかしんでゐるところへ、ほどたゝぬまに傳六が、息を切り乍ら駈け歸りました。――前後して奇怪な男もまた、バタバタと裏口から駈けかへりました。

不思議さうにその姿を見眺め乍ら、傳六がしきりと首をひねッてゐるのです。無論、今の目交ぜは、あッちの五分月代とこッちの青月代と、別人か同一人か、あッちにあの御家人がゐたかどうか、それをたしかめに走らせた合圖なのでした。

しかし傳六は　いかにも不審にたへないやうに、必死と首をかしげてゐるのです。男がまた、ひねッゐる傳六のその顏を見眺め乍ら、にやり、にやり、と氣味わるく笑ッてゐるのでした。

尋常ではない。なにか恐るべき秘密があるに相違ないのです。

『あッしや、あ、あッしや、こ、こはくなッた。ここぢや、ここのうちぢや、おッかなくて物も

言へねえ。顏を、か、顏をかしておくんなせえまし……』

眞ッ青になッて傳六が、名人の袖を引ッ張り乍ら、ぐんぐん表へつれ出して行くと、物の怪を拂ひおとしでもするやうに、ぶるぶると身をふるはせました。

『どこかに水があッたら、ざあッと一ぺえかぶりてえ。毛が、尾ッぽの毛がそこらについてゐるやうな氣がしてならねえですよ。ぎうッと一ッ抓ッてみておくんなさいまし。あッしやまだ生きてをりますかえ』

『馬鹿だな。ひとりで青くなッてゐたッて分りやしねえぢやねえか。一體どうしたんだ。野郎たちや全然別人か』

『――のやうなところもあるんで、ふたりかと思ッたら』

『やッぱりひとりか！』

『――のやうなところもあるんですよ。音藏のうちへ駈けこんでいッたら、裏口からもバタバタとあの町人らしい足音が飛びこんで來やがつてね、と思ッたら、表口へぬッと顏が出たんで、さては青月代かとよくよくみたら、黑い頭なんだ。あの御家人めがにッたりやッて、なにしに來やがッたとにらみつけたんでね、こいついけねえと思ッて、大急ぎにお駒のうちへ飛んでけえッた

ら、今見た通りまたパタバタと裏口から駈け込んで來やがッて、にやにやッてゐたんです。こんな氣味のわりいこたア二ツとありやしねえ、つらは同じなんだ。年恰好も同じなんだ。男ッぷりもそツくりなんだ。毛が生えたりなくなッたり、飛んであるくうちに月代が青くなッたり黑くなッたりするなんてえ、奇天烈は、弘法樣だッてど存じねえですよ。あッしやふるへが、ふ、ふるへが出てならねえんです……』

いかさま奇怪でした。二丁や三丁の道を走るうちに、伸びたり消えたり、自由に月代が變る筈はないのです。しかしそれならばふたりかと思ふと、そツくりそのまゝに似すぎてゐるところが不思議でした。傳六と一緒に飛んでいッたのも不思議ならいッたかと思ふと月代が變ッて、のぞいたといふところを推しはかッてみると、まさしく同一人のやうに思へるのです。

『迷はしやがるな。面倒だが手間をかけて、しッぽをつかむより法はあるめえ。兩方の近所へいッて、人の口を狩り集めて來な』

『きゝ込みですかい』

『さうよ。人の毛は肉の下から生えて來るんだ。氣まゝ勝手に取りはづしの出來る品ぢやねえ。ひとりかふたりか、多勢の目を借りたら正體も分るにちげえねえから、ひとッ走りいッて洗ッて

來な』

『よし來た。ちくしやうめ。タツブリと眉につばをつけていッてやらあ。どこでお待ちなさるんです。いづれはどこかそこらの食ひ物屋でせうね』

『お手の筋さ。おいらが食ひ物屋と緣が切れたら冥土へ近けえよ。あの向ふの突き當りだ。オナラチヤズケ、ウジリヤウリとひねッた看板が見えるぢやねえか。あそこにゐるから舞つておいで』

夕ばえ近い町を、傳六は左へ、名人は右へ、――御奈良茶漬宇治料理とかいたのれんが、吸ひこむやうに右門の姿をかくしました。

三

半とき、四半とき、とやかて日のいろが薄れて、ほの白い春の宵が、しッとりと垂れ落ちました。

精いッ杯のきゝ込みを集めてゐるとみえて、分れていッた傳六がなかなかへらないのです。

――寢てまち、起きてまち、頃と遊んで待ッてゐるうちに、人通りもおほ方遠のいた表の街から、バタバタと景氣のいい足音が、下の店さきへ駈けこみました。

『傳六か！』

『然り！』

『景氣がいいな。土産はどうだ。その足音ぢやたんまりとありさうだが、どうだ、分ッたか』

『……』

しかし傳六は、駈けあがッて來た元氣とは打ッて變ッて、しょんぼりと佇み乍ら、しきりと眉をぬらしてゐるのです。

『だめなのかい』

『いいえ、駄目とはッきり決ッたわけぢやねえんだ。音藏の方で五軒、お駒の方で五軒、〆て十軒探ッたんですがね。そのうちで、多分ふたりだらうと言ッたのが――』

『何軒だ』

『〆て五軒あるんですよ。いいや、ひとりかも知れねえと言ッたのがやッぱり五軒あるんだ。くたぶれまうけさ。いくら探ッてもやッぱりひとりかふたりか、雲が深くなるばかりで正體は分らねえんですよ』

『なんでえ。馬鹿々々しい。それならなにも景氣よく歸ッて來るところはねえぢやねえか。今頃

眉をぬらしたッておそいや』

『怒ッたッて仕樣がねえですよ。あッしのせゐぢやねえんだからね。ふたりかひとりか分らねえやうな奴が、この世智辛い世の中をのそのそしてゐるのがわりいんです。ほかに手はねえんだ。どうあッても正體を突きとめるなら、野郎たち兩方へ呼び出しをかけるより法はねえんですよ。ひとりだッたら一匹來るし、ふたりだッたら二匹來るし、そのときの用意にと思ッて、眉をぬらしてゐるんだ。――はてな、まッたり！　待ッたり！　何か急に騷がしくなりましたぜ』

ぴたりと聲を止めて、傳六が立ちあがりました。――きこえるのです、バタバタとあちらこちらへ駈け走ッてゐる騷々しい足音の中から、押しつぶしたやうな聲があがりました。

『人殺しだ！』

『火の見の下ですよ！　音藏さんと同じところに同じ恰好をして、また人が斬られてゐるんだ。人殺しですよ！　氣味のわりい人殺しがまた火の見の下にあるんですよ！』

むくりと名人が起きあがッたかとみるまに、いつにもなくいろめき立ッて、ひた、ひた、と宵の表へ駈け出しました。音藏と同じところで人が斬られたと呼んでゐるのです。しかも同じ恰好をして斬られてゐると叫んでゐるのです。――なるほど北松山町の通りを、火の見櫓目ざし乍ら

走りつけてみると、もうあたりは、一杯の黒だかりでした。

必死とその群衆を追ひ散らしてゐる自身番の御用提燈に、ちらりと目交ぜを送り乍ら、おもてをかくすやうにして、火の見の下へ近づきました。しかし、同時に右門も傳六も、思はずぎよッとなり乍ら棒立ちになりました。

うッ伏せに倒れてゐるむくろの頭に、見たやうな五分月代がつやつやと光ッてゐるのです。傷も、音藏そッくりのうしろ袈裟でした。ぐさりと見事な一刀斬りでした。

『顏をみせろ』

ぐいと、自身番の小者がねぢむけたその顏を見ると一緒に、ふたりはさらに愕然と二度おどろきました。まさしくあの御家人なのです。ひとりか、ふたりか、定めのつかぬあの顏が、白眼を空に見ひらいて、無言の謎の下に、無言の死をとげてゐるのです。

『ちくしやうめ。人をからかッた眞似しやがるね。毛はどうだ。毛は！　はりつけた毛ぢやあるめえね』

『引ッ張ッてみるひまがあッたら、あッちへいッた方が早えや。ついて來な！』

叱ッて名人は、まッしぐらにお駒のうちを目ざしました。疑問はそれです。同一人ならゐる筈

はない。別人だッたら、ふたりだッたら、或はまだお駒のうちに似た顏のあの町人が、とぐろを卷いてゐるかも知れないのです。

しかし、這入ると一緒に、ふたりは目を瞬りました。

ゐない。――似た影も、それらしい着物のはしも、ぱッたりこの世から消えてなくなりでもしたやうに、どの部屋どの座敷のうちにも見えないのです。

代りに、お駒がぽつねんと只ひとり、奥の茶の間の眞中に坐ッてゐるきりでした。おどろきも、悲みも、うろたへも、らうばいも、何の感情もない人のやうに、青さめた顏をしよんぼりと伏せ乍ら、ほのぐらい灯をあびて默々と坐ッてゐるのでした。

しかし、そのほそい青みすんだ手には、ほそい竹笹があるのです。

山雀を使ふ笹でした。

ゆらりと、たゝみのうへに、ほそいその笹の影が流れたかと思ふと、あいてゐた籠の中から、ピョン、ピョンと、梳き毛の美しい小鳥の影が飛び出しました。

『駒！』

『……』

『お駒と言ツてゐるんだ。きこえねえのか！』

しかしお駒は、血も熱もしぼりとられた、耳のない人のやうでした。ふり向きもしないのです。返事もしないのです。名人の鋭い聲もそしらぬ顏に、默然と坐ツたまゝ、青い手の中のほそい笞を、ゆらりゆらりと動かしました。

右へ動けば右へ飛び、左へ動けば左へ飛んで、怖いほどにも人馴れのした山雀が、手の笞の動くたびにその影を追ひ乍ら、ピョン、ピョンと躍りあるきました。とみるまに、笞が大きくゆれたかと思ふと、山雀もまたピョンと大きく舞ひ乍ら、お駒の肩へ飛び移りました。

チウチキ、チウチキ囀づり乍ら、しきりとなにかお駒の耳に話してゐるのです。

『やめろッ』

『……』

『用があるんだ。尋ねたいことがあるんだ。鳥を仕舞ひなよ！』

『……』

『さッきの野郎はどこへ消えてなくなッたんだ』

『……』

『口はねえのか！　お駒！　返事をしろ！　返事を！』

だがお駒は、ちらりと横目で見あげて、うッすらと笑ッたまま、そしらぬ顏でまたゆらり、ゆらりと笞を動かしました。

山雀がまた馴れ切ツてゐるのです。お駒の不機嫌をけんめいに慰めようとでもするやうに、きよと、きよとと、身ぶりをかしく首をふり乍ら、あちらへ、こちらへしきりと躍りあるきました。腹を立てたのは傳六です。

『じれッてえね。このつら樁へはひと筋縄で行く女ぢやねえんだ。物を言はなきや言ふやうに、ギュッとひとひねり草香のおまじなひをしておやりなせえよ！――やい！　駒！　口を持ッて來い！　口を！』

『……』

『むかむかするね。ひとひねり、ひねりあげりやどんな强情ッ張りでも音をあげるにちげえねえんだ。草香は春さきき〻がよし、女ならばなほき〻がよしと、物の本にも書えてあるんですよ。甘いばかりが能ぢやねえんだ。言はなきやあつしが目に物を見せてやらあ。――物を言へ！　物を！　言はなきや十手が行くぞ！　十手が！』

おそひかゝらうとしたのを、ひらりとお駒の笞が横に動いたかと思ふと、免許皆傳どころか實に見事な手の内でした。いつ拂ひおとされたか、ぽろりと傳六の十手がもう足元におちてゐたのです。

しかしお駒は、にこりともせずに、しんとした顏をして、ゆらり、ゆらりと、笞を輕くふり乍ら、山雀をあしらツてゐるのでした。あちらへ、こちらへ、――と思つて、ひよいと氣がつくとどこへ姿を消したか、その山雀がゐないのです。

名人はもとより、當のお駒もはツと氣がついたとみえて、われ知らず身をねぢ向け乍ら、部屋のうちを見探しました。

と一緒に、背のうしろで、バタバタとかすかな羽音があがりました。今の傳六のひと騒動にお どろいて舞ひ逃げたとみえて意外なところに止まつてゐたのです。

隣の部屋の佛壇の中でした。

只の佛壇ではない。たかゞ淺草の藝人風情には珍らしく立派な、珍らしく大きな、部屋にも座敷にも不釣合な位に見事な佛壇なのでした。

その中の位牌のうへに、きよとんと止つて、きよときよとと、首を振つてゐるのです。

ちらりと見眺めると同時に、右門の目がぴかりと鋭く光りました。

位牌がまたすばらしく大きく、すばらしく立派なのです。ばかりか、その表にきざまれてある戒名が、穏やかならぬ戒名でした。

『貫心院釋名劍信士――』

といふ字が見えるのです。院號、信士はとにかくとして、釋名劍と、劍の一字の交つてゐるのは、あきらかに、町人ではない。

『武士だな！』

『……』

『おやぢか。お駒！　それとも兄か！』

『……』

『誰だ、この位牌の主は！　いづれにしてもおまへの身寄りだらう！　身分もたしかに武士だらう！　傳六をあしらつた今の手の内、壹間お白洲で、この右門のつぶてを見事に躱した身のこなし、只の山雀使ひぢやあるめえ。强情を張つてゐるおまへのそのつら魂からしてが、たしかに武家育ち、槍ひと筋の匂ひがするんだ。武士だらう！　親だらう！　それとも兄か！　亭主か！』

鋭くたゝみ込んだのに、しかしお駒は氣味わるく押し默つたまゝでした。うツすらと、小馬鹿にしたやうに笑ひ乍ら、物憂げにまたゆらり、ゆらりと答を動かして、位牌のうへの山雀を招きよせました。

動くその影に曳かれて、ピョン、ピョンと躍り乍ら山雀が、ふた足、み足、歩いたかと思ふと、刹那、意外なものが點々とたゝみのうへに殘りました。

血です。血です。飛んで來たその道筋に、ちひさく紅い紅葉のやうな山雀の足跡が、濃く、薄く、だんだんとかすれて、二ツ、三ツ、四ツと疊のうへに殘ツたのです。

同時でした。右門よりもお駒があつとおどろいて、われ知らず聲を立て乍ら飛びつけると、うろたへ青ざめ乍ら、慌てて血の足跡をもみ消しました。

しかしおそい。

名人の目は、すでに早く電のやうに光つて、ピョン、ピョンと散つてゐる紅葉の跡を追つてゐたのです。――跡は、咲いたやうに赤く疊を辿ツて、ガツチリと大佛壇の乘ツてゐる板床の上で終ツてゐるのでした。

ぢツと見ると、その板床の上に、ねツとりとした血のぬめりがあるのです。しかもその血のぬ

めりは、大佛壇の下から流れ出た血の溜りでした。下段一杯にこしらへた戸棚の戸の合はせ目から、ちよろちよろと糸を引いて流れ出てゐるのです。

躊躇なく名人の手は、戸棚の戸にかゝりました。しかしそれと同時に、思はずぎよツと身を引き乍ら、立ちすくみました。

ぬツと手がのぞきました。顏がのぞきました。足がのぞきました。折り曲げたやうに死體を折ツて、戸棚いツ杯に押し込めてあツたのです。

しかもその顏！

すぱりと見事に片耳を削つて、深く肩まで斬りさげられてはゐたが、顏は、血によごれたその顏は、まぎれもなくさきほどのあの青月代の町人でした。

やはりふたりだツたのです。

ひとりではない、似た顏同志の別人だツたのです。

『野郎ツ、化かしやがツたね。火の見の下であツちが死んだら、こツちも煙のやうに消えてなくなツたんで、てツきり一匹と思ツてゐたんだ。ちくしやうめ、よくも今まで迷はしやがツたね。それにしても斬ツたは誰なんだ。お駒！　誰が殺したんだ、やい、お駒！』

牙をむかんばかりにして吠え立ててゐる傳六の横から、名人は射すくめるやうな目をむいて、ぢッとお駒の顔をにらみすゑました。

血いろはない。心も魂も、血の感情も、ひえ切ッて了ッたやうに冷然とあしらつてゐたさすがのお駒も、この動かせぬ事實をあばき出されては、もう隱し切れなくなッたとみえて、眞ッ青になり乍らふるへてゐるのです。

『フフン。さうだらう。飼ひ猫に、いや、飼ひ山雀に手を嚙まれるたアこのことさ。飛んだ奴が、ぴよんぴよんと飛んだばッかりに、飛んだところへ紅葉をつけて、お氣の毒だッたな。――その手に覺えがある筈だ。受けてみろッ』

ゑぐるやうに叫んで、パッと大きく名人が泳いだかと思ふとお駒目がけて眞ッ向から襲ひかゝりました。

しかしお駒もさる者、刹那にするりと體を躱すと、あざやかともあざやかな手の内でした。開いて構へたは、拳上段、――すいとその手が中段に下ッたかと思ふと、位もぴたり、一刀流か神傳流か、中段青眼に位をつけた無手の構へには、うの毛でついたほどのすきもないのです。見眺め乍ら、名人が莞爾と大きく笑ひました。

捕るとみせて、襲ッたのは、實を吐かせるための右門流だつたのです。

『その手のうちだ。見事な構へだ。どこの誰に習ッた何流か知らねえが、その構へ、その位取り、その身の捌き工合なら、男のふたりや三人、斬ッてすてるに雜作はねえ筈だ。どうだえ、お駒、覺えがあらう、むッつり右門の責め手、たゝみ吟味は、かくの通り味がこまけえんだ。もう知らぬ、存ぜぬとは言はさねえぜ。泥を吐きな！　泥を！』

『……』

『音藏の斬り口もスパリと一刀、今夜の火の見のあの御家人もスパリと一刀、この佛壇の中の奴もスパリとひと太刀、うしろと前と相違はあるが、三人とも見事な袈裟がけの一刀斬りだ。腕の立たねえものに出來る技ぢやねえ。このお位牌もお武家筋、おまへの手の筋もお武家筋、――山雀使ひ實は武家の娘、ゆゑあッて世間を忍ぶかりの姿のお駒と睨んだが、違ふかえ。むッつり右門は手さばきも味がこまけえが、眼の睨みも味が通ッてこまけえつもりだ。これだけたゝみ込んだらもう文句はあるめえ。白狀しな！　白狀を！』

『……』

『氣の永え奴だな、春さきや啖呵がぢきに腐るんだ。かけてえ慈悲にもぢきに蓙が立つんだ。世

を忍ぶもこの位牌ゆゑ、人を斬ツたもこの位牌ゆゑ、――素直に白狀しろとお位牌が睨んでをるぢやねえか。手間をとらせたらのこのこと動き出すぜ。どうだ、お駒ッ。また六十日ほども牢にへえりてえのか』

バタリ、と折ツたやうに首がさがツて、ガツクリと體が崩れると、しみじみとした聲が、つひにお駒の口から放たれたのです。

『さすがでござんす……。見事なお目きゝ、山雀使ひのお駒もかしらがさがりました。なにもかも仰有る通り、そのお位牌もお目がね通り槍ひと筋のものでございます。わたしもまたお言葉通り、山雀使ひは世を忍ぶかりの姿、いかにも武士の血を引いたものでございます』

『位牌はどなただ』

『兄でございます』

『兄！　さうか！　お兄上か！　名劍信士とあるご戒名の工合そなたの手の内あざやかさ、武家は武家でも只の武家ではあるまい。さだめし劍の道にゆかりのある仁と思ふが、どうだ違ふか』

『違ひませぬ。流儀は貫心一刀流、國では名打ての達者でございました』

『そのお國はどこだ』

『三州、擧母――』

『内藤樣の御家中か』

『あい、山雀の名所でございます。僅か二萬石の小藩ではございまするが、武道は至つて盛、兄も志をいだいてこの江戸へ參り、伊東一刀流の流れを汲んだ貫心一刀流を編み出し、錦をかざツて國へかへる途中、小田原の宿外れで、なにものかの手にかゝり、敢へない御最期をとげたのでございます。わたくし國元でその由をきゝましたのは八年まへの二十二の折でございました。父にも母にも先立たれ、兄妹といふはわたくしたちふたりきり、――あまたございました緣談も斷りまして、はるばる仇討に旅立つたのでございます』

『さうか！　仇を持つ身でございつたか。いや、さうあらう。六十日間、責められて、口を割らなんだ性根の坐り、讐があツては拷問えび責めにも屈しまい。その讐が音藏か！　いいや、今宵斬ツたこの者たちふたりか！』

『いえさうではございませぬ。それならばお駒もあのやうに强情は張りませぬ。事の起りはみんな似た顏のこのふたり、憎いのも今宵斬ツたあのふたり、駒はだまされたのでございます。ふたりにあざむかれて、罪も恨みもない音藏さんを斬ツたのでございます――と申しただけではお分

りでございますまいが、八年まへに人手にかゝりました兄上は、この位牌のぬしは、とにもかくにも一流をあみ出した者でございます。それほどの兄を斬ツた對手は、只の者ではあるまい。場所も小田原近く、いづれは江戸にひそんでをらうと存じまして、はるばる出府したのでございまするが、さうやすやすと讐のありか、讐の名まへが分る筈はございませぬ。それにわたくしは女の身、――討つには腕がいりませう。技も磨かずばなりますまいと探すかたはら劍の道も學んでをるうちに、時は經つ、貯へはなくなる。なれども、讐は討たねばなりませぬ。お兄上のお恨み晴らさぬうちに餓ゑ死にしてはなりませぬ、と思ひまして、思案にくれたあげ句』

『山雀使ひに身をおとしたと、申さるゝか』

『あい、左樣でございます。山雀は、可愛い山のあの小鳥は、名所の國にゐたころからの深い馴染、をさないうちから飼ひ馴らし、使ひ馴らして、長年飼ひ扱ツたことがございますゆゑ、耻しいのもかへりみずみんなこれも讐ゆゑ、兄上ゆゑと、小屋藝人の仲間入りをいたしまして、その日その日の口をすゝぎつゝ兄の仇を探してゐたのでございます。するうちに、似た顏のこの兄弟が――』

『ふたりは兄弟か！』

『あい。腹違ひの兄と弟であッたとかいふことでございます。江戸の生れで、由緒は何でございますやら、兄は御家人くづれ弟はバクチ打ちの遊び人、どちらにしてもならず者でございます。不思議なほどよく似たふたりが、通り魔のやうに現れて、因果な種を蒔いたのでございます。わたくしはこの弟めに見こまれ兄の方は――』

『あの音藏の妻女に懸想したのか』

『さうでございます。仰有る通りでございます。たびたびわたしにも言ひより、兄の方も音藏さんのご家内にたびたび言ひ寄ッたことでありませうが、そんなけがらはしい眞似が出來るものではございませぬ。あゝの、かうのと、あしらッてゐるうちに、ついわたくしが讐身つ身とこの弟めに口をすべらしたのが災難、――いいえ、因果な種となッたのでございます。兄弟ふたりして、うまうまとたくらみ、このわたくしに、兄の讐はあの音藏さんだとまことしやかに告げロしたのでございます。あの通り音藏さんは蔦のかしら、まさかと思ひましたが、いいや音藏は侍あがりぢや、そなたの兄を討ッたゆゑに、身をかくして蔦の者になッてをるのぢや、間違ひはない、兄弟して手を貸さうと申しましたゆゑ、八年の苦勞辛苦についわたくしも心が焦り、火の見の下へおびき出して來たところを、見事に討ッたのでございます。――と思ッたのが大の間違ひ

ふたりにだまされたことを初めて知ッたのでございました。音蔵さんを亡きものにすれば、やがてはあのご家内も想ひをかけた兄の手に這入る道理、過まッて人を斬らして、その弱みにつけこんでおどしたら、わたしも弟に身をまかせるだらうと、兄弟ふたりがたくみにたくんだ罠だッたのでございます。それと知ッて後悔いたしましたときはもう恐ろしい罪を犯したあとでございました。なんとかして罪をかくす工夫をせねばなりませぬ。その工夫も似た顔のこの兄弟ふたりが入智恵したのでございます。斬ッたは刀であるが、匕首を死骸のそばへすてておいたら、證據が合はぬ、傷口が合はぬ、さすれば捕へられても白狀せぬ限りやがてはご牢拂ひになるに相違ない、ひと月か二十日のことぢや、牢へ行けと、そゝのかしたのでございます。それゆゑわたしも素直に捕へられ、お牢屋へいッて六十日間あの通り――』

『よし分ッた。それでなにもかも分ッた。本當の讐も討たねばならぬ、だまされたと思へばその恨みもはらしたい、討つまでは、はらすまでは罪に陷ちてはならぬと、六十日の間、拷問、火ぜめ、骨身の削られるのもぢッと忍びこらへてゐたといふのぢやな』

『左樣でございます。六十日間のお駒の苦しみ、辛抱――お察し下されませ、ほんとに、ほんとに、死よりも辛い苦しみでございました。でも、ご放免になッたは、身のしあはせ、先づだまされた恨みをはらさうと、――いいえ、いいえ、だまされて手にかけた音藏さんへのお手向に、申しわけに、兄の方は同じ火の見の下へおびき出し、弟の方はこの裏の井戸端で、見事に斬り果したのでございます。――なれども兄の讐はまだ分りませぬ。どうあッても探して討たねばなりませぬ。探し出して討ち果すまでは、三人斬ッたその罪もかくして、と存じましてさきほどからの通り、あなたさまへもあのやうな强情を張ッてゐたのでございます。――斬りました。お駒は三人を、人三人を音藏さんと、似た顔のこの兄弟ふたりを、人三人も手にかけた罪人でございます。なんとも申しませぬ。よろしきやうにお計らひ下さりませ……』

聲をおとして、崩れ伏すやうに泣き入りました。三人を害めた罪があるのです。しかし兄の讐は、探して討たねばならぬのです。討たぬうちにまた曳かれて行かねばならない悲しさが心を、胸を、切りゑぐッたものか、悶えるやうに身をよぢり乍ら泣きつゞけました。

ぢッと見守り乍ら、長いこと右門も無言でした。――しかし、嗚咽の聲が、よよと泣きざむお駒のむせび音が、なさけの絲をかき締めたのです。

『きッと討つか！』

刺すやうな聲が、くづれ伏してゐるお駒の白く青いえり首へ飛びおちました。

『なさけをかけてやッたら、きッとお兄上の讐を探し出して、必ず討ッてみせるか！』

『討ちまする！　それが武士の娘のつとめ、いいえ、いいえ、駒も侍の血を引いた者でございます。討たいではおきませぬ！』

『どこにゐるか分ッてをるか』

『分りませぬ。なれども分るまでは三年かゝらうと九年かゝりませうと、必ず探しとほして、見んごと討ッてお目にかけまする！　この顔が皺に埋まりませうとも、この黒髪が雪のやうに變りませうとも、必ずともに討ち果してお目にかけまする！　貫ぬいてお目にかけまする！』

莞爾とした笑ひが右門の顔に咲きました。

『その決心氣に入ッた。むッつり右門、討ち貫ぬくと言ッたその決心を買ッてやらう！　行けい！　すぐ逃げい！』

『ではあの、では、では、駒を、この駒の罪をお見のがし下さるといふのでございまするか！』

『見のがさう、見事に討ッてかへるまで、罪は責むまい。四年かゝるか、十年かゝるか知らぬが、むッつり右門の目の黒いうちは、むッつりのこの口に錠をおろして、啞にならう。待ッてやらう。——討ッたらかへッて參れよ』

『あ、ありがたうございます……。こ、この通りでございます……』

『行け！　人目にかゝッては面倒ぢや。裏口から早く逃げい』

『參ります！　參ります！……では、ごきげんよう……』

『まてッ。大切な品を忘れてはならぬ。おき去りにしたらお兄君が叱りませう。お位牌を持ッて行け』

『ほんにさうでございました。抱かせていたゞきまする。——お兄さま、靈あらばご覽なさりませよ。おきき遊ばしませよ。では、では、必ず探して、必ず討ッて、必ずかへッて參りまする。くれぐれもごきげんよろしう……』

しッかと兄の位牌をその乳房の上に抱いて、あはれに暗い夜ふけの町へ、ふりかへり、ふりかへり、お駒の姿は遠のきました。その姿の行方を、影のあとを追ふやうに、飼ひ馴らしてゐた山雀が、バタバタと悲しげに羽ばたきをつづけて、あはれにも悲しい聲をあげ乍ら、チイ、チイと啼き立てました。

あちらへ、まごまご、こちらへまごまごし乍ら、傳六が泣き泣き鳥の影のあとを追ッてゐるのです。

『めそめそ泣いてなにをやッてゐるんだ』

『鳥が可哀さうです。せめてあッしもなにか功徳をと思ッて追ひかけてゐるんですよ。――來い。來い。このをぢさんだッて大きになさけはあるんだ。かへるまで飼ッてあげるよ。おッかねえ事はねえ。早く來い。來い。ここへ來な……』

聲をきいたか、山雀がくるくると目を丸め乍ら、ぴたりと傳六の手にとまッて、またひとりで籠の中へ這入りました。

讐を討ッていつの日お駒が、右門のところへかへッて來るか、それまでは右門捕物帖も筆を休めて時を待ちたいと思ひます。――作者。

昭和十六年九月十五日印刷
昭和十六年九月二十日發行

完本　右門捕物帖　第五輯

㊒定價金六十錢

著作者　東京市下谷區上野町二ノ四　佐々木味津三

發行者　東京市下谷區上野山下町二　須藤滋

印刷者　東京市下谷區上野町二ノ四　栗原光三

發行所　東京市下谷區上野町二ノ四　明正堂
電話下谷(83)六七七二番
振替東京三七〇六一番

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

日本出版文化協會會員登錄番號一三四〇〇九

鐵道弘濟會印刷場印行

完本

右門捕物帖・全七冊内容

各冊六十錢
各篇讀切

第一輯	手柄話第一番——第六番	南蠻幽靈　生首の進物 血染の手形　青眉の女 笛の秘密　謎の八卦見
第二輯	手柄話第七番——第十一番	村正騒動　卍の文身 達磨を好く遊女　耳のない浪人 身代り花嫁
第三輯	手柄話第十二番——第十六番	毒色の唇　足のある幽靈 曲藝三人娘　京人形大盡 七化け役者
第四輯	手柄話第十七番——第廿二番	蛇使ひ小町　明月一夜騒動 袈裟斬り太夫　千柿の鍔 妻戀坂の怪　因縁の女夫雛
第五輯	手柄話第廿三番——第廿七番	幽靈水　呪ひの藁人形 卒塔婆を祀つた米櫃　七七の燈 獻上博多人形
第六輯	手柄話第廿八番——第卅二番	お關扱帶の秘密　開運女人地藏 闇男　毒を抱く女 朱彫りの花嫁
第七輯	手柄話第卅三番——第卅八番	死人風呂　首つり五人男 左り刺しの匕首　子持ち硯 血の降る部屋　山雀美人影繪

417
107

終